痛みとウサギと追いかけっこ

こぎん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
痛みとウサギと追いかけっこ

【Ｎコード】
Ｎ９７１９Ｙ

【作者名】
こぎん

【あらすじ】
少年は異世界に迷い込んだ、勇者と魔王でもない第３の存在として、
世界征服しちゃいなよ！あとついでに神様も殺っちゃいなよ！そうすれば君は神様だ！
そんなかんじで世界征服始まります。

プロローグ

「あと・・・5分だけ・・・」

いや、わかってるんだ

ここが自分の部屋じゃないことくらい

「現実逃避してても始まらないか」

目を覚ますとそこは金の苔のベットとよくわからない木の根が見える壁にに囲まれた洞窟だった。

それにしても夢ではなさそうだなぁ

つねった頬が痛いや・・・

苔で覆われてるけどこのふかふかしたベッドみたいなのは何なんだろうか・・・

あぁとっても気持ちいいなもう一眠りしてもいいかな？

ごめんよ、パ〇ラッシュとっても眠いんだ・・

そのままもう一度夢の中へ落ちていった

俺はたしか翌日が休みって事もあって最近熱中しているＲＰＧゲームをしていて

気がつけばもうすぐ3時って時間までやりこんでいた

明日、というか今日は友達と一緒に旅行に行く約束をしていたので

睡眠を取らないとダメだと踏んで布団に入ったはずだったんだった

「ふっ、認めたくないものだな二度寝したのにも関わらずまったく状況が変わってません！実は夢でしたーっていう夢落ちを期待したんだけど」

俺はいつもどおりジーパンに通気性のいいＴシャツというラフな部屋着だった

「そういえば寝巻着は着てたはずなんだが」

寝間着よりかはマシなのでうろついてみようかな

これはまたマイナスイオンがたっぷりと補充できそうな・・・ジャングルですね

そして目の前に自分の身長＋２０ｃｍくらいの向日葵にしか見えない植物が生えていた

おれの身長は１７０くらいだから十分育った向日葵なんだなぁ

周りの木が日の光なんて遮ってて他の植物がほとんど無く苔がはえているのにもかかわらずその向日葵はとてもキレイな大輪の花を咲かせていた

怪しいと思いつつも近寄ると向日葵が『嗤った』

これはやばい

とっさに後ろに下がろうとしたが手に噛みつかれてしまった

「ぐっ・・・はなせっ！」

「ギャー」

無理やり向日葵を引っ張るとあっけなく向日葵は途中からちぎれて動かなくなった

「いつから向日葵はこんなに活発に栄養を求めるようになったんだよ」

栄養が少ないのかそれとももともと肉食植物なのか

幸い腕の傷はかすり傷程度ですんでいた

「こんな向日葵でも種は食用になったりしないかな・・」

痛みより食欲が勝った瞬間だったがしばらく種等を観察していると向日葵は小さな紅い石のようなものを残して消えてしまった

キレイな石だったのでそれをポケットに入れると壁伝いに歩いていった

「ＲＰＧならお金とか薬草とか落としてくれるはずなのに石ってどういうことなんだ」

しばらく歩くと滝がありここを下っていけばきっと人のいるところ

に着くだろうと川沿いに歩いて数分後

遠くから金属のこすれる音、と多くの足音が聞こえてきた

ここはまず日本であるわけが無いというより地球であることすらあやしい・・・

そんな所で金属の音＋足音って言われても安心できないむしろさっきの向日葵みたいなモンスターの可能性もある

さてここで問題です

俺はどうすればいいでしょうか？

1　何かの大群に助けを求める

2　このまま隠れて様子をみる

3　見つかる前に別の道を探して逃げる

俺は2を選ぶ！

1は論外うかつすぎる、3は見つかる可能性が高い、2ならばダンボールで敵の目を欺く工作員もいることだしきっといける！

おっと来たみたいだ

何を言ってるのかわからないけど馬？に似た動物に乗り両刃の剣を持ったおっさんが何か叫んでる

「イーツ？　ニョルニンド？」

ダメだ、日本語でないどころか英語ですらなさそうだ・・・実は英語で俺がヒアリングできてないだけという可能性は無きにしも非ず

「よし、行ったな」

ますます異界である可能性が高まってるんだけどここで捕まったら解剖されてＢＡＤＥＮＤ？

「うわぁ・・・これってフラグ？」

がさがさ・・・がさがさ・・・

「！！？？」

そこには簡単に言えばデフォルトキャラクター

間違ってもかわいいとは呼べない生物、

耳に傷があり、手にはキセル、背中に秋刀魚を背負ってるウサギ

という3頭身しかないモノがそこにいた

「ｌｓ５ｒｋ２５２ｌｆｓ３４。ｓｍｖｋ」

今度はまったく理解できない言葉だったが敵意は感じられない

「えっとここはどこで町はどっちでしょうか？」

そのデフォルトキャラクターはおもむろに手？を輝かせると

鳩尾に強烈なボディーブローを決めた

「ぐふっ・・・げほげほ・・・」

「いぇ・・・わしのこぶしはひゃくまんぼる←と→じゃけぇのぉ・・・」

デフォルトキャラクターに殴られたとたんに奴の話している言葉が理解できるようになった

「あー、なんで殴られたのかとか聞いてもいいかな？」

「おぅ！ぼーず！いいしつもんだぁ・・・それはなそこにいぶ→んか←こう→りゅう→があるからよぉ！」

「うん、わからん。まぁ言葉が通じるようになったのは感謝するよ」

「ぼーず！ここであったのも何かの縁だ！ええもんやろか！て→ーだしな」

「そーいやぼーず！てめぇの名前はなんてぇんだ？」

「俺の名前は森　修・・」

「だまらっしゃい！」

「へぶっ」

あれ、自分の名前を言おうとしたら突然殴られたよ？痛みは無いけど口の中切ったみたい鉛の味がする

「あんたみたいなのは名無しで十分なんだよっ」

どうしよう、いきなり俺の名前は名無しになったようです

「って、人の名前をいきなり改名してんじゃねぇよ！俺には修一ってなm・・・」

「せか→んど←ふり→すき→ー！！！」

「ぐはっ」

「おいらぁ→呼ぶときは疾風のジョーって呼べ→やぁ→」

「おか・・しい・・・・だろ・・・」

デフォルメキャラクターのアッパーで俺の意識はそこで途切れた。

その1～RPGの基本は情報収集から～

あの不思議な生き物に殴られてからどのくらい時間がたったのかわからないが太陽の位置から大体昼過ぎだと判断する

ここが異世界なのはよくわかったけどこれからどうすればいいのだろうか

変な生き物のおかげで言葉は通じるようになってるみたいだし

RPGの定番からするとこの世界の魔王的なラスボスを倒せば元の世界に返れたりするんだろうけどそういった場合大抵は、召還されて

「おぉ異世界からの勇者よ！私たちのために魔王を倒してくれ！」

ってのがお決まりなはずなんだけど

と視線を感じて後ろを振り向くと

これが山賊です！っていう皮の装備に身をつつんだマッスルさんがびっくりした顔で立っていた

「えっと・・・どこから見てました？」

振り向いた状態で問いかけてみる

「あーるぴーじーのていばんからって所あたりから」

ふむ、心の中の呟きのはずが口から漏れていたらしいうわっ！ハズ

カシ！

体ごと振り返って咳を一つ、きっと自分の顔は真っ赤なんでしょうねー

「オホン！・・・初めまして、町はどちらでしょうか？」

数人いた山賊が全員一定方向を指差してくれた。

「ありがとうございます！では！さっきのは忘れてください！」

では！のあたりですでに全力で指差した方向へダッシュしている。

「お、追えッ！逃がすんじゃないよ！」

後ろの方から追っ手がやってくるのがわかる。

もしかしたらこのまま逃げ切れるかもなんて都合のいい考えだったようだ。

すぐに追いつかれて囲まれてしまう。

振り返って一人に話しかける

「えっとお金なんて持ってませんよ？」

とりあえず金銭を持ってないことを自己申告

「俺等は金が欲しいだけじゃねぇんだ」

「・・・何が欲しいんです？」

「全部だよ、とりあえず《イーツ》について知ってることを吐きな」

イーツ・・・そういえばさっきそんな単語を聞いたな。

「それなら向こうへ向かう集団がそんなことを言ってましたね、それ以外は知りませんよ」

「そうか、ならてめぇは用済みだ、こんなところでゴブリン共の餌にするより奴隷商にでも売って俺等のために金に換えてやるとにするか！」

困った！大ピンチだ

自分の周りにはさっき話して奴を含めて４人、ナイフを持ってるから一気に襲われたらひとたまりも無い

となると

「先手必勝！」

大声で叫んで走り出す一歩を踏み込むその瞬間前にいた２人はナイフを構えて腰を落とした

それを確認すると後ろへ全力で飛ぶ肘が右にいた山賊の顔に当たり倒れる、

そのまま右へ方向転換して走り出す。

少し距離が開いたところで足元の地面が消え俺は落ちた。

落ちた高さとしては１ｍくらいだろうかそこから急な坂になっておりここまで転げ落ちてきた

周りの壁は自然とできたにしては整いすぎているところからみてきっと人の作ったものなのか魔物の巣なのかのどちらかだと思う

「いてて・・・ここは地下か」

周りの苔が薄く発行しているので真っ暗とまではいかないが見える範囲はせいぜい２メートルも無いだろう

向日葵のような生物がいないとも限らないので落ちて乾燥していた根っこの切れ端を持って出口を探して彷徨いだした

細い通路を歩いていると前の方から子供くらいの大きさの影が複数こっちへ向かっていた慌てて近くのわき道に隠れると

所謂　≪ゴブリン≫　と呼ばれるモンスターがゴフ！ゴフ！と言い

ながらゆっくりと通り過ぎていった。

「ゴブリンということは魔物の巣で間違いなさそうだな。」

さっきの山賊が言ってたことを信じるならゴブリンは肉食でパクリといかれちまうそうだ。

ほんと、この世界はいろんな意味で退屈させてくれないな、ご飯にされそうになったり、奴隷にされそうになったり

さっきのゴブリンとは逆の方向へ向かうと少し開けた場所に出た

そこにはゴブリン４体とひときわでかいゴブリンのリーダーのようなのが２体の合計６体がいた

さてこの世界の基準は知らないけど俺の知っているＲＰＧならゴブリンはチュートリアルにでてくるような雑魚扱いなんだが

ゴブリン達の装備は棍棒と木の棒かなリーダーの方はナイフのようなものを持っている

今俺の武器はずっと持ってる乾燥した根っこと『安全靴』だ

普通の一般人は日頃安全靴なんて履いてないと思うんだが

俺の場合は過去に細い道でトラックとすれ違ったことがありその時に靴をタイヤにはさまれたことがある少し大きめな靴を履いていたこともあり骨折どころか怪我も無かったんだがその頃から安全靴を履くようになった。

ただし所々手が加えてあって走っても不自由が無いようになっている。
手を加えてない安全靴で走ろうとしたことがあったがその時は鉄板の端が足の甲などに当たりとても痛かった。
さてまずは6体いっぺんに相手をすると確実に負けるだろうからできれば2体くらいをこちらにおびき寄せて片付けたい
ちなみにこの時の俺は『異世界』、『ダンジョンちっくな場所』という二つの理由でハイテンションだった。

その部屋から少し離れると足元から石を拾い上げて投げる

カツンっと小さな音を聞きつけたリーダーゴブリンは下っ端4体に命令を出して確認させに来た

一列にならんだゴブリンが狭い通路を歩いてこちらへやってきた。
ゴブリンは天井が少し崩れて音を立てたと判断したのだろう後ろを向いたその瞬間
俺は後ろから根っこを振り上げて一番後ろにいたゴブリンになぐりかかった。
根っこは折れて使い物にならなくなったが襲われたゴブリンは倒せ

たようだ。

いきなりの奇襲にゴブリン達は少しの混乱を見せているその間に殴り倒したゴブリンの持っていた棍棒を拾い上げるのと同時に2体目のゴブリンの顎目掛けて振りぬいた。

ゴッっという鈍い音を立てて2体目のゴブリンが後ろに飛んだ。

2体目のゴブリンは3体目のゴブリンとぶつかったところで俺は2体目のゴブリンを踏みながら3体目のゴブリン胸元に蹴りを入れた

3体目は4体目を巻き込んで後ろに転がった。

3体目のゴブリンの喉を思いっきり踏みつけて4体目のゴブリンの顎を蹴り抜く。

4体とも動かなくなったことを確認する4体とも腹が動いているところをみると気絶しただけのようだ、頑丈だな・・・ゴブリン

さっきの広場まで戻ってくると2匹のリーダーゴブリン達は広場の真ん中辺りにいた

まだリーダー2匹の他にはゴブリンは見当たらないがナイフぽいものを持った相手を二人相手するのはしんどいのでこっちに来てもらうことにしようか

作戦は石をリーダーに向かって投げると後ろの通路の曲がり角を曲がったところで待ち伏せる。

追ってきたリーダーが曲がり角を曲がったところで棍棒による一撃と蹴りで一匹しとめる

残り一匹も流れでしとめるという考えだった。

足元の石を拾い手前のリーダーに向かって投げる！走ってくるリーダーを曲がり角まで・・・って火の玉！？

リーダーは魔法なんて使えるのかよぉー

曲がり角をまがった所で火の玉が壁に当たり火の粉を散らした。

俺はゴブリンが角を曲がりきる前に棍棒をフルスイングするとリーダーその１は頭を軸に半円を描いて地面に倒れた。

間髪入れず顎を全力で蹴り抜く！さっきのゴブリンとは違ってゴリっという手応え？足応え？があった

最後のリーダーはナイフを振り上げてこちらへ走ってくる棍棒の持ち手をぐっと握ると思い切り突き出した

リーダーその２は棍棒は叩くもので突くことは無いと思っていたようで顔面に直撃する。

後ろに２，３歩下がったのでそのままの勢いで胸を蹴り飛ばす

１メートルほど飛んだのを確認し足元からリーダーその２が落としたであろうナイフぽいものを拾い上げると起き上がろうとしている

リーダーの頭を蹴る

最後の一撃は靴の角がクリーンヒットしたらしくリーダーその２は転がっていった。

そのあと少し待っているとその１とその２は向日葵と同じように緑の石とナイフぽいものを残して消えていた。

「またこの石か今度は緑色って何かあるのかな」

とりあえずさっきの４体のゴブリンが戻ってくる前にここを離れるか

広場の奥にまた道を発見したのでそちらを進んで行くと鉱石のような石やきっとここでやられた人間の鎧と思われる物などが置いてあった。

「これは宝物庫だよな、となるとさっきのリーダーだと思ったゴブリンはここのボスだったのかな」

所々に金、銀のコインが置いてある！これはこの世界のお金かな

おれの中のＲＰＧの鉄則

その１勇者とは家捜しするもの！

その２魔物の宝は勇者の物！

その３魔物と戦う時は全力で！

その４出会った魔物はとりあえず倒してみよう！

という鉄則があるのでとりあえず使えそうな物ををいただいていこう

ざっと見回すとコインの詰まった袋、ボロボロの鎧、何かの石

そして・・・腕輪？

必要なのはコインの袋の中に石を入れて腕輪を左手にはめる

「ちゃちゃちゃん！なぞのうでわを装備した！・・・もしかしてこれ単なる装飾品かな？」

こっちの鎧は使い物にならないな・・・というより着方もわからないや

宝物庫に入った時と出てきた時では見た目が少し変わっただけで実際の戦闘力に変化は無かった。

出口を探して彷徨っていると階段を見つけた！ただし下り・・・

降りてみると悪臭が漂っていた。

ここは牢屋のようだ人がいれば助けてみるかもしかしたら出口を知ってるかもしれないし

牢屋だけあって見張りがいるな2体だけかな？ならこのナイフだけでいけるはず

2体のゴブリンの内一人は椅子に座って眠っていた。もう一人はその近くに立っていた

階段に背を向けた瞬間にすばやく近づいて立っていたゴブリンの口を押さえながら首をナイフで切る。

寝ているゴブリンも同じようにして倒した。

ゴブリンたちが消えると牢屋の鍵だと思われる鍵束と棍棒と両刃の剣が残っていた。

牢屋に近づくと牢屋の中には鎖に繋がれた人型の影がいくつか見えた。

「大丈夫ですか？」

俺の声に反応して数人の声が聞こえる

「たすけ・・・なのか？」

「たすかったの？」

ふむ生存者がいたようだ、地下に出口は無いだろうからって理由で降りずに出口探索しなくて正解だった。

「すぐにここから出しますね」

生存者は４人

最初はもっと数がいたらしいが一人また一人と数が減ったらしいこと

商人のキャラバンが野営中ゴブリンの大群に襲われここにいるメンバーが連れ攫われたらしいこと

後で聞いた話なのだがキャラバンというのは品物を買い付けに行く際いくつかの商人などが襲われにくくするために集まって行動する集団のことを指すらしい

なんとかゴブリンの巣から出た俺と貴族の娘だというリーナさん、リスティさん、がっしりした体格のベルムンドさん、商人のグルマさんの４人は近くの村まで一緒に行動することになった

しばらく歩くと大きな川がありその近くに村があるそうなので野営の装備もない俺等は急ぐこととなった。

衰弱しきっていたリーナさんを背負いながら近くの村を目指した。

村の入り口に差し掛かると警備の兵士の一人がこちらを見て走って近づいてきた。

「大丈夫ですか！酷い様子ですがどうしましたか？」

「ゴブリンの巣で捕まっていたので保護して来ました」

「わかりました、こちらへ」

その兵士さんはすぐに衰弱した人たち部屋へ寝かせるとと医術士の手配をしてくれた。

その1～RPGの基本は情報収集から～（後書き）

小説は難しいとつくづく思ってしまう。
これから主人公にはいろいろと無双してもらったりハーレムをって考えてるとストーリがめちゃくちゃになる不思議

その2～回復アイテムは大事～（前書き）

サブタイトルはその場の思いつき！

前回は穴に落ちてゴブリンをドーン！一人質救出！一町到着！↑イマココ

追記：通貨に問題が出てきたので多少変更しました

その2～回復アイテムは大事～

「君が助けてくれた人たちはこちらで保護しよう、今日の宿は決まっているかい？」

商人のキャラバンがゴブリンの集団に襲われたのは一週間前らしく「ギルド」から捜索も出ていたそうだ

「いや、これから宿屋を探すんだがおススメの宿とかあるか？」

「コニード亭にするといい美人な女将さんがうまい飯を出してくれる」

兵士の一人はギルドの方に連絡しておくから明日報酬を取りに行ってくれというと別の兵士に呼ばれて行ってしまった

「うまい飯とやらを食いにコニード亭とやらを探しますか！」

夕方ということもあり店じまいを始めている姿がちらほらみえる目的のコニード亭はすぐに見つかったというより看板の自己主張がはんぱなかった。

他の店の看板は木を彫って作ってあるのにここのカンバンは極彩色の光を放っていた。

「いらっしゃい！泊まりなら１０Ｇ食事・湯付なら２０Ｇだよ！おや、みない顔だけどこの町は初めてかい？」

「もろもろ付でお願い、今日着いたばかりでね」

「そうかい！ようこそフューディル１の宿コニード亭へ！」
現在の持ち金２２３５Ｇ　金貨、銀貨、銅貨等いろいろな貨幣と価値について説明をしてくれたコニード亭の《おねーさん》はここの女将さんでメリルさんというそうだ。
食堂ではメリルさんの旦那さんであるジョーイさんが料理を作っていた
厨房の中で赤いトカゲに羽根の生えたような生物が飛び回っていた
衛生面とか大丈夫なのだろうかと気になったが他の宿泊客やジョーイさんも気にしていないようなので放っておく事にした
晩飯はスープとパンでスープは薄味がこのあたりでは主流だそうだ。
満腹になった俺は自室に引っ込むと自分の持ち物を確認した。
ナイフっぽいもの２本
コインの入った袋
よくわからない腕輪
以上・・・
ふわふわしたベットで眠れるのだから満足する・・・か
ベットに入ったとたんに眠気が襲ってきた。Ｚｚｚ・・・

「おい・・・聞こえるか○○・・・くそっナナシじゃないと通じないのか」

「ナナシ！我の声は聞こえているな」

あーはいはいばっちり聞こえてますよー

「我は貴様だ、いや貴様のなかに植えつけられた種というべきか」

種？そのうち俺の体を食い破って成長するの？

「いや実際の貴様の体の中にいるわけではない、貴様が出会った生物がいたであろうあやつの能力は≪あの生物が≫望んだモノを相手に与える代わりに対となす同等の何かを相手に与えるというものでな」

ナニソレコワイ勝手に与えてその分料金を払えって詐欺みたいな能力

「今のところわかるのはやつがきさまに与えたのは「解読」と「俺様」くらいだな対となすのは「貴様の名」と「不運」と「俺様」だな」

うん、おかしいね！対って言ってるのにメリットが2つでデメリットが3つだよ、そして与えた「俺様」とそれの対の「俺様」ってなによ

「我には能力がありそれには反動もあるとそういうことだ、おそらく貴様も同様の能力が使えるはずなのだがそのうちわかることだ」

いまいち納得いかんのだが・・・ところでさっきから俺と話してるあんたは誰だ？

「我は貴様に廃k・・いや与えられたモノもとより名など無い」

今廃棄って言ったよあの生物俺の中に自分にはやっかいなものだから廃棄していったのかよ

あんたじゃ味気ないなよし！『レオ』って呼んでやろう自分でも我って言ってるし

「いいだろう！我、レオはいつも貴様ともにある今はこのような時でなければ会話もできんがいつか語り合える時もこよう」

朝か・・・

今日も一日世界が平和でありますように

山賊とかゴブリンとかファンタジーはそれほどお呼びでないんだよね実際のゴブリンは思った以上に気持ち悪くて全力で「殺し」にいったんだよねぇ

ちなみに俺はふつーの一般人であって伝説の暗殺一家の息子だとか凄腕の殺し屋でもないただの人だ

ライトノベルとゲームを好み友人と《拳で》騙りあったりする普通の人だ。

さてご飯でも食べて「ギルド」とやらに行ってみるか！

【ギルド】モンスターの討伐・捕獲から家の掃除の手伝いなど数多くの依頼を冒険者等に紹介する仲介屋、各地に点在しその地域に応じた依頼があるFから始まりSまでのランクがありそのレベルに応じた依頼を達成し一定額を納めることでギルドランクを上げることができる。当然ランクが上に上がるほど難易度・報酬も上がっていく

ギルドに行くと中には入るとたくさんの人の合間をすり抜けるようにしてカウンターの前へ

「すみません！昨日守護隊の人にここへ来るように言われてたのですが」

「はい～ゴブリンの巣から救助なさった方ですね～」

受付のおねーさんはとてもほんわかしていて話していると周りの時間ゆっくり進んでいる気がする

「えーっとぉギルドにー登録はーされてますかー？」

おお！揺れた！おねーさんが笑顔で小首を傾げた瞬間たわわな果実がユサッと揺れたのを俺は見逃さなかった

「と、登録はしてないんだ」

おっといけないいけない慌てて声が上ずってしまった、あくまで紳士的に、紳士的に

あ、おねーさんも笑ってる・・・

「ではーこちらのー登録用紙にー記入してーくださいねー」

おお、我様の言ってた【解読】のおかげなのか文字が読めるそして書ける！

「ではーこちらへーどーぞーこの水晶にー手をーかざしてーしばらくーおまちーくださいねー」

水晶にしばらく手をかざしていると水晶の中心が黒く濁りだした

ナナシさんのぉランクはぁFランクからぁスタートとぉなりますぅ

ギルドカードはぁ明日に完成しますのでぇまた明日来て下さいねぇ

依頼は今からでもぉ受けることがぁできますよぉ

とのことだった

疲れるあの間延びしたしゃべり方はとっても疲れる

ゴブリンの方の報酬は３００Ｇで依頼としてはＦランクの依頼だったそうだ。

ギルド加入の際に粗品としてもらったこの手甲付のグローブそれなりに使いやすそうなので装備して出店でも見て回ろうかなとギルドから出たところで声をかけられ振り向くと

キラキラの宝石がたくさんついた派手な鎧を来た剣士とケバイ化粧のねーちゃん、大剣を持った剣士の三人組が立っていた

「俺様はレイナルド＝スフィーリアス！スフィーリアス伯爵家の次男である」

「私共はレイナルド様に使えております レイリアと」

「バルガスと申します」

「どうも、ナナシです」

伯爵ってどのくらい高い地位だっけかな

「やぁやぁナナシくん！君はとても運がいい！この私はこれからオーク討伐の依頼でダンジョンに行くのだが君も一緒に来ないかね？」

俺の見立てが正しければ盾か雑用を探していてちょうどいいところにＦランク《新米冒険者》の俺が来たってところか

「報酬は３００Ｇ、薬草とこの盾は前報酬であげよう」

まぁダンジョンとやらに興味がないわけでもないから着いていって

みるかな

「いいですよ！ただ道具を入れるバックが無いので買ってきます」

「いいだろうではこちらで依頼をしておくので東門の所で落ち合うことにしよう」

いろんな店があるけどバックなんてどこで売ってるんだろう

おぉ！獣耳の美人さんを発見した！あの人に道を聞いてみよう

「すみません！道具屋ってどこにあるかわかりますか？」

おや？このおねーさん驚いているように見えるんだけどなんでかな

俺変な事言ったかな？

「私は獣人族だよ？」

「そうなんですかーかわいい耳ですね」

顔が真っ赤になってうつむいてる姿もいいです！

獣耳、少し褐色肌、金色の髪、ライトブルーの瞳そしてもっふもふのしっぽ！

いいよね！尻尾を持つものは正義だよね！

「あっちに・・・道具屋があるよ」

「ありがと！おねーさんの名前は？」

「・・・イスカ」

「俺の名前はナナシ！」

と自己紹介したところで彼女がビクッと震える

「・・・どうしたの？」

「なんでもないの・・・またねナナシ君」

彼女は駆け足で人ごみの中へ消えていった。

どうしたんだろ・・・何か用事でもあったかな？とりあえず道具屋へ行こう

「いらっしゃーせー！ランタンから回復薬まで何でも揃うボルドー商会だよー」

あつっ！？あの店の周りだけ人が逃げてるよ・・・

「すみませーん」

「はいぃ！いつもニコニコボルドー商会！今日のお求めは何でしょうか！本日はランプ油がとてもお買い得となっております！さぁ！お客様は私どもの店に何をお求めになってまいられたのでしょうか！」

ごめん、ちょっとこわい、ものすっごい勢いでしゃべってるよこのおにーさん

「今日冒険者になったんですがバッグとか必要なものを買いに来たんですが」

ざわ・・・・

離れてこちらをみていた人たちが一斉にざわめきだした

「かわいそうに」

「誰だよ初心者にボルドーさんとこ教えたの」

「私今使える最上位の回復魔法用意しとくからね」

「あのおねーさんの下着は黒だった」

よし、わかった・・・とりあえず最後の人その話を詳しく聞こうか！じゃなかった・・・おや目の前のボルドーさんがガッツポーズのような感じでフルフル震えている

「我らボルドー商会！」

ん？後ろから声が・・・

「いついかなる時でも」
「お客様第一に考え」
「いつでも安全な商品を」
「お届けいたします！」

おーい・・・どこの戦隊物ですか？爆発したよ？ボルドーさん後ろにいたはずなのにいつの間にそこに？

「ボルドーさんの爆発が控えめだと！？」　「おいおい・・明日フェーディル壊滅か？」

「いやまて！まだ終わったわけじゃない」　「あれは幻のＦ！？アレの為なら牢屋に入ることも厭わない！」

最後の人！待てそのＦを掴むのはおｒ・・ゲフンゲフン確かにＦは魅力的であるがいきなりおさわりは犯罪だ！ここは一言「素敵な胸ですね！揉ませていただけませんか？」と断りを入れるべきだ！

「そうだったな・・・ありがとう同士よ・・・」

言葉に出てないのに通じちゃったよ・・・

「お客様！失礼ですがお名前を伺ってもよろしいですか？」

「あぁ、ナナシといいます」

「ナナシ様！私どもボルドー商会は今後貴方様と友好な関係を築いていけると確信しております！」

「お求めの商品ですがこちらなどはいかがでしょうか！」

「商品Ａ－１５をここへ！」　　「「「「よろこんで！！！」」」」

もうここ道具屋じゃないよね

「こちらの商品は冒険者必須のバッグから水、薬草、野営装備など基本装備一式が詰まってお値段なんと５００Ｇ！」

高いのか安いのかさっぱりわからん

「おや、ナナシ様この商品少し高いんじゃないかという顔をなされてますね！さすが！冒険者様！私どもも商売人そこの駆け引きは忘れておりません！いつもなら５００Ｇのこの商品！今回はなんと３００Ｇにて御提供させていただきます！」

一気に２００Ｇも減ったよ

「さらに！」

まだ何かあるのかよ

「今ならこのランプ油と戦闘でも採取でもどんなに乱暴に使っても切れ味の落ちにくい万能ナイフもつけてお値段そのまま３００Ｇ！これでいかがでしょうか！」

すでに赤字じゃないのかこれ・・・

「あの、こ「んー！ナナシ様は商売上でいらっしゃる！仕方ありま

せん！さらにこの雨をはじき寒さか身を守るのにとても役立つコートを3枚つけましょう」」

あーうんこんなにつけて大丈夫なのかって聞こうとしたんだけどコートついちゃったよ

「・・・・それでいいです」

「「「「「ありがとうございましたぁ！」」」」」

商人こえぇぇ・・・

ゴブリンを倒したお金は飛んだけどいっぱいつけてもらえたしまあいいか

さて東門へ行こうか

その日、フェーディルの村で「胸を揉ませてください」と言いながら魔法使いの胸をつかんで黒こげとなり全治一週間の怪我を負った勇者がいたと翌日の朝刊で広まった

その2～回復アイテムは大事～（後書き）

商人が元気になりすぎました
獣耳っていいよね・・・上目遣い涙目で獣耳たまりませんね・・・
さて次は伯爵さまとダンジョンです
どうするかなそろそろエロス&グロ交えていかないとテンションが持たないね

その3～戦闘開始～（前書き）

人物紹介ってひつ・・ようかな？

その3～戦闘開始～

「まだ来ないのか？くそっ！あのガキこのレイナルド様を待たせるとは！これも貴様があのガキを使えば楽にダンジョンを進められるというから入れてやったというのに・・・」

「申し訳ありません」
この貴族様：レイナルド＝スフィーリアスが東門についたのは3分程前だというのに従者とこのやり取りをすでに5回以上も繰り返している・・・従者ってのはよほどMな精神の持ち主か大きすぎる器の持ち主でないとできない仕事だと門番は思い出した頃にナナシがやってきた。

「お待たせしました」

「遅いぞ！さっさとダンジョンへ行くぞ！」

「かしこまりました」

ダンジョンとは世界が自然と生み出した洞窟のようなもので気付いた時にはそこにあったとされるためいつ誰がどのようにしてダンジョンを作っているのかは定かでない。

目当てのダンジョンは町の近くにあるらしいのでそこまで歩いていくこととなったがダンジョンに着くまでレイナルドの「俺様ってすごいだろ話」を延々と聞く事となり戦闘が始まる前から気疲れしてしまった。

「よーし！ここが『力』のダンジョンだ！よし！ナナシ貴様から先にダンジョンに入れ！」

「入れといわれても入り口が無いんだけど」

「・・・それに触れれば入れる」

ダンジョンの入り口は小さなオブジェのようなもので手で触れると自分の周りが輝いたと思ったら次の瞬間には洞窟の中にいた。
そのあと俺、バルガス、レイリア、レオナルドの順に入ると持ってきたランプをつけて歩き出した。
今回はゴブリンのときとは違って盾があり初ＰＴ戦だったがレイナルドのくだらない話の合間にダンジョンの様子聞いていたおかげでぼんやりと理解していた。

地下１階はゴブリン、スライム、大蝙蝠などのモンスターで１対１なら俺でもなんとか倒せるレベルだった

このときはまだ自分が囮としてこのＰＴにいれられたことを理解していなかった。

地下２階へを降りていくと大広間があり入って数歩進んだところにソレはいた。
２ｍほどの高さのゴブリンのような姿、防具のようなものを身にまとい、口から垂れた唾液、手に持った棍棒・・・アレがオークか

「一匹だけか俺様にかかれば楽勝じゃないか！お前ら！俺様の勇姿をみてろよ！」

とレイナルドが剣を抜いて切りかかる

「くらえぇ！」

バキン！

音を文字に表すとそんな感じだろうか

レイナルドの剣はオークに傷つけることなく折れてしまった。

ブォォォォォ！

「グホッ！」

オークの一撃でレイナルドが吹き飛び壁に叩き付けられる自慢の鎧はオークの一撃で丸い凹みが見えた

「レイリス！坊ちゃまを！ナナシ！行くぞ！」

バルガスさんが叫ぶのに従い、オークへ駆け寄る近くで見るとさらに大きく見える。

ここに来るまでに学んだ事、俺の役割は相手をひきつけておいてバルガスさん達の攻撃のチャンスを作ること、なのでナイフっぽいものでオークを切りつける折れはしなかったものダメージもほとんどなさそうだ。

「避けろ！」

バルガスさんの声が響いているが俺はとっさに盾を構えてしまった。オークの一撃は盾を砕き、レイナルドとは逆方向へ吹き飛ばされた。バルガスさんの大剣がオークの頭を粉砕し、オークの巨体が倒れる。バルガスさんはオークを倒した証拠としてオークの素材を剥ぎ取っていく、へこみのできた鎧を着けたレイナルドがレイリスさんと共にこちらへやってくる。

「おい貴様！貴様のせいで俺のこの剣は折れ、鎧はこの通りへこんでしまったではないか！すべて貴様のせいだ！」

見ていろって言ったのは自分ですよ？

「この剣と鎧の修理代として１０万Ｇ払え！」

おいおい、そんな金持ってるわけ無いだろ？俺は初心者冒険者だぜ？２２３５Ｇしか持ってないぜ？

「そんな金持ってるわけ無いだろ？」

「これだから庶民は・・・貴様はこれから俺の奴隷としてこき使ってやる！」

ナニソレそろそろキレてもいいよな

「お！あんなところに宝箱があるではないか！見つけたのは俺様だから中身も俺様のものだ！」

宝箱に目掛けて走っていくクソ貴族様、毒針でもささって死なないかな・・・。

「レイナルド様！いけません！」

バルガスさんが制止をかけるがそれを聞かずに宝箱を開けるレイナルド

「中身は・・・」

カチッ

カリカリカリカリカリカリカリカリカリカリ・・・・

壁の一部が開いていくのと同時に入り口が閉じていき、開いた所からオーク数匹のオークが押し寄せてくる。

「うわぁぁぁぁ」

レイナルドは叫びながらこちらへ戻ろうとしているが慌てすぎてこけてしまう。

《アイスバレット》【双断】

レイリアさんは氷の弾丸を打ち出しバルガスさんは大剣を振るうがオークの数が多く押され気味である。

四方をオークの群れに囲まれてしまった俺達に

「坊ちゃま！このままでは全滅です！撤退しましょう！」

バルガスさんがクソ貴族に進言するが

「俺様がオークごときを相手に逃げれるか！」

と突っぱねてしまう。
そこへひときわ大きく紫のオークが現われた。
周りにいたオークは雄たけびを上げるだけで仕掛けてこないようになり紫のオークがどんどん近づいてくる。

「ディスオークだと！？このダンジョンにそんなモンスターはいなかったはずだ！」

バルガスさんは舌打すると剣を構えてディスオークに向かっていく！
剣を振り下ろした時

何が起きたかわからなかった

大剣が折れて飛び

バルガスさんの体が粉々に砕ける。

ディスオークは持っていた剣を振っただけだった。
一番近くにいた俺は血飛沫を浴びてしまっていた、とても金臭い匂いがあたりに充満している。
「レイリス！あいつにオークどものが集中している今のうちに逃げるぞ！」

レイナルドとレイリスは水晶のようなものを持つと一瞬まばゆい光を出して消えてしまった。

オークたちの笑い声が響く

残るは俺とオーク達だけ
俺はまだ死にたくは無い、怪我は無いが恐怖で体が動かない。
震える足で立つと
ふっと静まり返る・・・
「貴様は逃げないのか？」
見た目はオークというモンスターなのに人の言葉を話している
「ひ、人の言葉を話すのか？」
声は上ずっていたが通じるだろう、足がガクガクしている
「人の言葉を話しているわけではない、人間！貴様は俺の言葉がわかるようだな」
楽しそうに笑うオークは不気味である。
「先ほど貴様達が殺した亡き戦友の弔いとして貴様を殺す」
ブゥォォォォォォ！！
雄たけびと共に突っ込んでくるディスオーク！唯一の武器であるナイフのようなものを構える。
周りはオークに囲まれていて逃げることは不可能、なら近づく！

俺のナイフをディスオークの胸に突き立てるがディスオークの剣は俺の体を貫いていた。

体から力が抜けていく・・・

とてもここは寒い・・・・

体のそこから凍えていくようだ・・・・・・

・・・・・・・・おいおい、まだ敵は生きてるんだぞ？もう終わりか？

だって俺、剣で刺されたんだから、死んだんじゃないのか？

俺様の体があんな鈍らで斬られた程度で死ぬ体なわけないだろ？
ちっ！しゃーねーなー！お前に自分の体の使い方を見せてやるよ・・・・・ちゃんと《視て》るんだぜ！

「貴様如きでは傷もつけれんと思ったが、俺にナイフを突き立てるとはなだがこの程度かすり傷でしかないわ」
ディスオークが笑う、周りのオークたちもそれにつられて笑う

「そうか、ならば二回戦を始めようか」
剣で貫かれたはずの体から紡がれた声にすべてのオーク達から驚きを隠せなかった。
「馬鹿な・・・俺は貴様を貫き確かに殺したはず・・・」
「そうだな、確かに貴様は体を貫いた」
「ならばなぜ貴様が生きている」
「体を貫いた程度で俺が死ぬと思ってるのか？」
カカカと笑う、この異様にはこの部屋にいるすべての生き物が恐怖した。
「貫いて死なぬのならば！粉々に砕いてくれる！」
ディスオークが剣抜き走っていく
「これで砕け散れぇぇ！≪剛腕爆砕≫」
爆音ともに周囲に砂煙が立ち込めるディスオークの剣は床に大きなクレーターを残す
周りを囲んだすべてのオークがディスオークの勝利を確信した今度こそあの人間は粉々になったと

砂煙がおさまっていくとうっすらとディスオークの姿が見え出した剣を振り下ろした姿のままディスオークは動かない。

「当たらなければどれだけ威力があっても無いのと変わらないのだぞ？」

砂煙がおさまった後オークたちが見たのは素手で体を貫かれたディスオークと鱗に覆われた尻尾と額から1本の角を生やし鎧のような鱗を纏った『レオ』の姿だった。

「本調子ではないがちょうどいいディスオーク貴様を喰らって我の魔力としてやろう」

ディスオークの姿が一瞬揺らぐと『レオ』の中へ吸い込まれていった。

「オーク程度では腹の足しにもならんな・・・あぁ、安心しろ貴様ら、すぐに同じところに送ってやろう」

レオは一番近いオークに近づくと半分に引き裂いた

それを見たオークたちは我先と開いている扉へ走っていく、しかし通路は開いていて向こう側が見えているのにまるで壁でもあるかのように進むことができない。

レオはゆっくりと一番近いものから順に肉塊へ変えていった。

一面オークの屍骸で埋め尽くされた部屋で嗤う一匹の異形

数時間後にやってきたほかのＰＴは足の踏み場が無いほどに捨てられているオークの死体を見てまるで地獄のようだとつぶやいたという。

＊＊＊森の中＊＊＊

「ここは・・・町の近くかな？」

・・・・おう目覚めたか！・・・・・

「だれ？」

・・・・俺だ、レオだ！・・・・・

あれは夢じゃなかったのか・・

・・・・どーだ、人間の限界とやらは味わえたか？・・・・・

人間のっていうか今の俺の限界だけどね

・・・・安心しな、お前にもう限界は無い・・・・

限界は無いって寿命とか向き不向きとか人には越えられない壁とかあるじゃないか

・・・・ナナシ今の見た目こそ人のなりをしているが今のお前はれっきとした人外だ・・・・

たしかにエロスは人一倍好きであの手この手を使っていたらいつの間にかエロスの人外ってあだ名がついてたけどそれでもやっぱり人間だよ！！

・・・・ナナシ、そういうことではない嘘だと思うのであればそこらの木を殴ってみよ・・・・

木？これすっごく立派な木だよ？俺が三人いてようやく囲めるくらいの、どこぞの御神木とかじゃないよね

・・・・そこいらに生えてる木だ気にせず殴れ・・・・

結果：木を貫通しました。

・・・・というわけだ・・・・

木が倒れるんじゃなくて貫くなんてどんな力してんだ俺。

・・・・貴様はこの世界に来たときからこの力は持っておったが、大きすぎる力は貴様の身も滅ぼすと思い、我が抑えておったのじゃが・・・・

抑えてたのに？

・・・・オークと戦ってる時に面倒になってな（笑）我もおるし何かあれば起こってから何とかすればよいだろうと思ってな・・・・

面倒って、そういえばオークと戦ってた時の姿は？

・・・・本来の我の姿が人の形を取ったものだな・・・・

そっか、さて町でこの姿だったら不審者だよな

今現在の装備はこんな感じ

ぼろぎれに近い服胸の辺りに大きな穴

ズボンはホットパンツに近い

極め付けに全身が人間の血とオークの血でパリパリになっている

・・・・・このままでは無理だな、そういえば向こうに川があったな・・・・

いや血を落としてもズボンの替えなんて買ってないし

バッグはレオが回収してくれていたようだ

・・・・今の貴様なら自分の魔力を変換して服程度簡単につくれるであろう？・・・・

俺そんな便利なことできるの？

・・・・本来のイーツとなったナナシにできぬことなどほとんどないわ・・・・

ほとんどって・・・・ん？イーツってなにさ？

・・・・イーツとはこの世界で勇者と魔王が神の意思をはずれ世界に歪みが出た時に現われるという存在だな・・・・

そのイーツとやらはその世界で何すんの？

・・・・今の勇者は魔王を倒さず世代交代したとか聞いたことがあるな今は3代目だったか、そして魔王は魔王で魔物を増やし世界征服を狙っておる、通常であれば勇者が魔王を倒すもしくは負けるなどしてサイクルが回るはずだったのだが倒さないことによってサイクルが滞りおぬしもみただろう先ほどのディスオークのような例外が多発するようになるのだ・・・・

じゃあ勇者に魔王に挑戦させればいいのか

・・・・何の為にイーツにこのような力があると思ってるのだ？貴

様は勇者と魔王を倒して世界を征服する神となるのだ・・・・
なるのだ！じゃないよ世界征服するなら魔王でいいじゃないか
・・・・今の魔王にそこまでの力はないせいぜい村を息一つで焼き尽くす程度だ・・・・
魔王こわっ！それでよわいの！？
・・・・全盛期なら吐息で町４つは簡単だったな、とにかくナナシは世界を征服してついでに神を殺っちゃえばそれでいい・・・
神様の殺害を殺っちゃえって軽くないか？
・・・・まぁこの世界の神は概念だけであって意思などないからな・・・
と話をしている間に川についたな
流れも緩やかだしもぐってみるか魚が取れたらいいな
・・・・そっと掴むんだぞ今のお前は粉々に砕きかねないからな・・・
お、おう
そーっと・・・

そーっと・・・・・・

ここだぁ！

・・・・ここだぁ！じゃないほらみてみろ見事に魚の跡形も無いぞ、今なら魚の動きが簡単に追えるだろうに・・・・

人のときの感覚でやっちゃうんだ☆

・・・・こんなことでは女性の手もおちおち握れぬな・・・・

うぉぉぉ！ソフトに！やわらかに！相手を傷つぬよう我が手は栄光を掴み取る！

・・・・わざわざ無駄に魔力を使って時を止めて魚を掴むでない・・・・

ご飯ゲットー！生・・・は怖いから火を起こさないと荷物から火打石を出そうとしたところで

・・・・火もだせぬ男など女性は歯牙にもかけぬであろうな・・・・

はぁぁぁぁぁ！俺の魔力よ！炎なって燃え上がれぇぇぇぇ！バァーニィーング！

何も起きなかった。叫んだ俺の声はむなしく轟いた。少し恥ずかしかった。

・・・・そういえば、ナナシには魔法の使い方の説明をしてなかったな、ナナシの場合だと、【対象】【現象】【時間】さえ頭の中で

イメージできれば魔力の方が勝手に行ってくれるだろう・・・・・

ではもう一度、《魔力よ！燃え上がれ！バーニング！》

空高くまで炎の柱ができました。

・・・・魔力の伝達率がよすぎるせいか・・・・

その後服を作りコニード亭へ帰ってきた俺はとりあえず布団へダイブして意識を手放した。

その3～戦闘開始～（後書き）

主人公チート始まります
きっとここまでがチュートリアルなんだろう。

その４～誰でも最初はたたかう一択～（前書き）

構成が甘すぎて物語が迷子

前回はダンジョンへーこんなはずでは！ーセカンドチャンス！は逃さないっ！

その翌日のお話から始まります

その４～誰でも最初はたたかう一択～

「んー！いい朝だ！」

・・・・ふむ心地よい朝日だな！・・・・

レオの声が聞こえる・・・やはり昨日の事は夢でもなんでもなかったようだ。

そういえばこんな時の為の歌があったな・・・らら～ら～言葉にできない♪

現実逃避しても何も変わらないのでギルドに行って昨日のクエストの報酬をもらいに行こう、あのクソ貴族がきっと報告を終わらせてるだろうから最悪死亡届けの撤回が必要となるかもしれない。

ギルドの入り口に立つと中から怒鳴り声が聞こえてきた

「おい！貴様！受付の分際で俺様を馬鹿にしているのか！同じことを何度も言わせるな！残り二名は死んでもうこの世にいない！さっさと報酬をよこせ！」

おっと聞き覚えのある声が聞こえて・・・相変わらず不快感がうなぎ上りするお声ですね。

「ですがナナシ様のギルドカードはまだ起動しておりまだ生存状態となっております、よってギルドとしてはクエストの報告を受け付けることはできませんー」

＊＊＊基本的にギルドは冒険者を縛る規則などは無いのだが初心者をいきなり無理なクエストへ放り出すこともできないので最低限の

ルールが存在する、その中の一つにクエスト受注者Ａが初心者Ｂを
ＰＴとしてクエスト受けクエスト報告の際にＡのみで報告すること
はできない、ただしＢが生存している場合に限るというものがある
＊＊＊

「そんなはずはない！バルガスが死んでいるのにあの初心者が生き
ているわけが無いだろう！ちゃんと調べろ使えないクズが！」

あの馬鹿の頭がぱーんってならないかな・・・
昨日のすばらしいバストのおねーさんに向かって使えないクズとは
あの胸はすでに凶器といっても過言ではない！現にほら入り口に立
ってたはずの俺はフラフラといつのまにかカウンターにまで足を進
めてしまっているではないか。
あれは一種の魅了だよね、恐るべし。

「き、貴様！？」

おっと、おねーさんの魅了に負けてカウンターにやってきた俺に馬
鹿が気付いたようだ。

「あぁ、悪いな死んでなくて、というわけでおねーさんは悪くない
しクズでもない、クエスト報告いいかな？」

そういえばさっきまで口調がのびのびじゃなかった気がする、おね
ーさんもこんな奴相手だとむかついたりするんだろうか

「はいー報告はー終了ですーナナシさんはーＥレベルーおめでとー
ございますーこれでーいちおーいっぱんレベルのー冒険者レベルと
ーなりますーそれとー先ほどはーありがとーございましたー」

会話に割り込んだ際に実は馬鹿が剣を抜こうとしていて気付かれないように腕つかんで止めていたのだがどうやら気付いていたようだ。

「でもー女性とはなすときはー目をみてくださいねー」

こちらがどこを見ていたかも御存知でした。

「おい、ここにもう用は無い！おい行くぞ！」

クソ貴族様が去って行く、付き人はレイリアさんの他にフードを被り、ジャラジャラと鎖に繋がれた人だったが慌ててがこける。

「おい！とろとろするな！さっさとついてこい！」

・・・胸糞悪くなるな・・・・

手足を鎖に繋がれた人がそんなに早く歩けるわけが無い・

「おい、くsレイナルドさん」

いきなり猫がはがれるとこだった。

「なんだ庶民！この俺様にまだ何かあるのか！」

こけた人に手を差し伸べながらクソ貴族に話しかける

「この人なんで手足を鎖で繋がれてるのかは知らないけどあんたみたいに早く歩けない事くらいわかるだろ、鎖を解くか、ゆっくり歩くかしたらどうだ」

「ふん！奴隷をどう使おうか俺様の勝手であろう？それにその女は獣人なのだぞ鎖に繋がれているのがお似合いの下級民族ではないか！」

クソ貴族は近づいてくると奴隷のフードをとった・・・

そこにいたのは金髪に獣耳をつけた褐色肌の獣人で昨日広場で会ったイスカだった。

「バルガスが死んだ代用品になりそうな奴隷を見繕っていたら昔、俺様に歯向かってきた獣人がいてなその時慰謝料代わりにこの娘を俺様の奴隷としたのだ！まぁ歯向かった獣人は切り殺してやったのだがな！ははは！」

我が物顔でベラベラと話す馬鹿

逆に俺は冷めていった・・・どこまでも

「だまれよ馬鹿貴族」

イスカの鎖を千切って馬鹿の足元へ投げる。

「貴様！自分が何をしているかわかっているのか！俺は貴族で貴様は一般の冒険者！その一般の冒険者ごときが貴族である俺の物に手をだすということを！」

「悪いな、俺は自分の好きなように、やりたいようにやるだけだ！」

・・・はははは！いいなぁ、それでこそ俺のナナシだ！・・・

顔を赤くしていた馬鹿にレイリアさんが何かを伝える。

「勘違いしているようだが奴隷の契約はすでに終わっている！闇神：ディムルアの力を用いて装着者を主人の意のままに従わせる≪従属の首輪≫！その首輪がそこの獣人の首に着いているのがその証拠だ！」

「こんなもの壊してしまえばいい」

「闇神：ディムルアの力の宿りしアイテムがそう簡単に破壊できるものか！それを破壊しようとした者が闇に包まれて消滅したという話もあるがそれでも試すか？いいだろう首輪が破壊できればその奴隷を貴様にやろう、まぁ無理だろうがなぁ！ハハハハ！」

何がそんなに面白いのか高笑いする馬鹿を無視してイスカに話しかける。

「イスカ・・・もしかしたら失敗して一緒に闇に飲まれちゃうかもしれないけれど挑戦してもいいかい？」

「・・・・あいつの言いなりになるくらいなら死んだほうがマシ」

「ＯＫ」

首輪を千切ろうと力を込める、とたんに全身に痛みが走る！

「ぐッ・・・」

――汝、己の過ちを認めぬ気か――

レオと話すように頭の中に声が響く・・・

イスカはぶつかっただけで奴隷にされたんだ、下級民族だからと罵られて

――我、汝を障害と認定、排除する――

イスカの首輪より黒い触手のようなものが俺の体を締め上げていく

・・・この程度か！、我を内包せしナナシを傷つけるなら全力でかかって来い！・・・

「あああぁぁぁぁ」

首輪に亀裂が入る

「そんな馬鹿な！《服従の首輪》にヒビ！？まさか！そんなこと聞いたことも無いぞ！」

レイナルドは首輪を外そうとして消えていった愚か者を何人も知っているだからこそ闇に包まれて消えた愚か者と一縷の希望を失った愚か者という結末が当然待っているものと思っていた。

――馬鹿な！我の攻撃がまったく効果を成さぬだと！？このようなことはあってはならぬ――

・・・認めぬか、ならば認めさせてやろう！これが我らよ！・・・

「砕けろぉぉぉ！」

首輪が砕けるとあたりに光の粒が舞っていた。

「馬鹿な、嘘だ・・・」

ぶつぶつとつぶやき続けるレイナルド、まわりでみていた冒険者や町の人々もこの結果を予想できた人間はいなかったようだ。

イスカは「ありがとう、ありがとう・・・」と泣いている、その頭を撫でながら

やっぱり獣耳と尻尾はいいものだ・・・とナナシは呟いた。

夜になってようやく宿に戻って来ることができた。

首輪を壊した後、レイナルドはレイリアさんに連れられて屋敷へと帰っていった。

この国の権力は内包する魔力に比例するものであり、これまで町の人々は貴族の一方的な理不尽にも耐えるしかなかった。

それを一般人であるナナシがイスカを助ける事によって初めて貴族

に「反抗」したのである。
これを見ていた町の人々は大いに喜び今の今まで広場でこれを食べなあれを飲みなというもてなしを受けたのだった。
イスカはいろんな人からお酒を振舞われて酔いつぶれて宴の終わりまでずっと俺の膝を枕にして眠っていた奴隷から解放された事が伝わったイスカの両親が眠っているイスカを見て「娘を頼みます」と言ってきた時には焦った。

・・・ナナシ、良き宴だったの・・・

あぁ、楽しかったな

そんな時ドアがノックされた。

「開いてますから、どうぞ」

おっと、これまで誰も来るはずがないと思っていた分警戒してなかったけど部屋の中でレオと話しているのを聞かれたら独り言を言ってる怪しい人扱いじゃないか！

ドアを開けて入ってきたのは、イスカだった

「あ、あの！きょ、今日は本当にあるがとうごじゃいまひた！」

真っ赤になってカミカミな台詞で頭を下げる獣娘・・・イイネッ！じゃなかった。

「俺はしたい事をしただけだよ、それに感謝の言葉は昼間たくさん聞いたよ」

「あの、それで・・・ですね・・・」

なにか言いたそうにもじもじしている彼女に椅子に座ってもらい俺はベッドに腰掛けた。

彼女の顔は火が出そうなくらい真っ赤になって下を向いている。

ふむ、何か伝えたいことがあるようなんだが何を伝えたいのだろう。

・・・ナナシ、このメスの様子を見て何をしに来たのかわからぬのか？・・・

「顔を真っ赤にしてもじもじしている獣娘ってかわいいよね」（何かを伝えに来たというのはわかる）

「ひぅ！？」

イスカから変な声が漏れてこちらをずっと見ている・・・少し潤んだ上目遣いで

ん？もしかして漏れてた？

・・・あぁ漏れていたな・・・

「あの・・・私を貴方のモノでいいので連れて行ってください！」

「あー、俺のモノって？」

「貴方の奴隷という事です」

イスカが手渡してきたものは昼間壊した首輪と似た物だった。

・・・獣人族が自ら自分をもらってくれと言うか・・・

「イスカ」

「はい」

「ダメだ」

「どうしてですか！？」

「俺は君に自由に生きて欲しかったから首輪を壊したんだ、なのに君は自分から首輪をつけてくれという」

「私は一度奴隷としてあの貴族に飼われました、獣人族は誇りを重視する種族なんです、ですが魔力は弱く襲われて奴隷にされて戦闘の盾にされたり慰みものにされることも珍しくないんです。」

「だから俺に君を飼えと・・・」

「ナナシ様は私を助けてくださいました！広場で会った時にナナシ様は私の耳や尻尾、首輪を見たうえで私に話しかけてくださいました、アレがなければ私は舌を噛み切って死んでいたかもしれません、なんでもします！食事の用意も戦闘だって！それに・・・ナナシ様が望むのであれば夜の相手であっても！ですから私に首輪をつけてください！」

従属の首輪は2重にかけることはできないらしくナナシにつけてもらえばいやな貴族に襲われることもなくなると考えたらしい

さてどうしたものかな？レオ

・・・今ナナシに足りぬものはこの世界に対する知識、この娘を連れて行っても問題は無かろう？それにお前はこの娘が嫌いなわけではないであろう？ならば何を迷う？・・・

いや、この子に首輪をつけて縛りたくないっていうのと奴隷っていうモノになじみが無くて

・・・ふっそんなことであったか、首輪の方は我が何とかしてやろう・・・

レオと話し合いイスカと向き合う

「イスカ・・・本当に俺でいいんだな？」

「はい！」

「わかったその気持ちうれしく思う、だが俺は君を首輪で縛りたくないんだ」

「でも、それだと・・・」

「だから君自身に俺のモノだっていう紋章を刻み込む」

「でもそんな魔法聞いたことがありません」

「あぁ、だから俺に任せて欲しい、いいかなイスカ？」

「はい、私はすでに貴方のモノですから」

イスカがふんわりと笑った、その笑顔はこれまでの彼女のどの表情より美しく、可愛らしかった。

レオが提案した従属の首輪対策は従属の首輪に組み込まれているディムルアの魔法をイスカの体に刻印として刻むものだった。

心の臓に近ければその効果も大きくなるというので月明かりだけが照らす部屋の中でイスカは上半身をあらわにした。

彼女の金の髪が月明かりの中美しく輝き、豊満ではないがメリハリのあるボディラインと形のよい胸にナナシは息を呑む。

「で、では刻むぞ」

ナナシがイスカの胸にキスをすると不思議な模様が浮かんだ。

・・・これで首輪の魔法でこの娘は操れんよ・・・

「これで大丈夫だ・・・」

よと続けたかったがイスカに唇でふさがれてしまって最後まで告げることはできなかった。

「これからどうぞよろしくおねがいしましゅ！」

夜はまだ長い、このままイスカを押し倒してしまおう！そうしよう！

・・・・・我は何もみておらんし、利いておらん・・・・・

夜の闇が支配する部屋の中、月明かりというスポットライト、二つの影が再び近づき・・・

重なる。

後日、獣人族にとって首輪は婚約指輪のようなものと教わりイスカと二人で首輪を買いに行った

その４～誰でも最初はたたかう一択～（後書き）

ようやくヒロイン登場！
全部書き終わってから自分で読み返すことを楽しみにしている筆者です
マイリストに入れてくださっている方がいてびっくりしました。
のんびりマイペースで投稿して行こうと思います
私の下手な小説でも読んでくださった方ありがとうございます。

少し変更しました！

その5～時には逃げることも戦術～（前書き）

前回は！

報告に行こう！→貴族様コンチャー！→首輪なんぞしてんじゃねぇ！

ということの続き

その5～時には逃げることも戦術～

コンニチハ！ナナシです！現在ベッドの上で右腕に認めたくない重さとやわらかさがあります！
右腕を枕にして眠る美少女獣人のイスカ、ここでもし俺がタバコをくわえていたら・・・バードボイルド事後です！きっとメリルさんにも「昨夜はお楽しみでしたね」って言われる！
まぁまて俺！落ち着いて、れれれ冷静になれ！

「んっ」

ワーニン！わーにん！カカシ隊長殿報告いたします！イスカ，ｓ美乳が我が腕に押し付けられてトランスフォームしております！

・・・カカシ・・・

レオ殿！現状を打破する画期的な方ｈ・・・

・・・くくくっ！煩悩にまみれた我が半身よ！理性のストックは十分か！？・・・

という問答をしているとパッとイスカの眼が開く、琥珀色の瞳がこちらを見つめている。

「えっと・・・おはようございます」

恥じらう顔がまたかわいい！

クリーンヒットォ！理性が砕けちったぁ！そんな声が聞こえた

１０分ほどイスカをぎゅっと抱きしめる

うむ！やわらかい！いい匂い！これはもう手放せない！

そんなことがあって少し遅めの朝食を取っていると銀の鎧を来た集団が入ってきて女将さんと何か話す少し困ったような顔をした女将さんが俺の方を指差す。

「我らは銀翼の守護騎士団副団長ヴリニア＝リーデルトである！ナナシという冒険者がこの宿にいるとの情報を得て参上した、ナナシというのはお前か？」

おや？何か雲行きが怪しい気がする。

「確かにナナシは自分の名ですがどうかしましたか？」

「堂々としたものだな自分の行いを考えればなぜ守護騎士団が来たかも予想できるのではないか？」

何かしたかな？まずこの世界に来てから騎士なんていう知り合いを作った覚えも無いんだが

「思い当たる節があるようだな一緒に来てもらおうか！」

手を縛られて連行される
イスカも同じように手を縛られているようだ
「どこへでも着いて行きますよ」
ピコピコと耳が揺れる、癒されるなぁ・・・
「ナナシの奴隷か、一緒に連れて行け」
表に止まっていた馬車に乗せられると馬車はすぐに出発した
「えっとこの馬車はいったいどこに向かっているのでしょうか？」
「守護騎士団本部のある王都ベルリアに決まっているではないか」
王都って事は首都みたいなものか、でっぷりして白いひげをたっぷり生やした王様が宝石のついた杖とか持って長いマントを引きずって歩いてる絵を頭の中に思い描く
イスカはナナシの隣にぴったりとくっついていた。
御者台で馬を操っていた兵士の一人が悲鳴を上げて『燃える』
「敵襲！総員戦闘準備！」
今の位置からだと敵の姿は見えない、魔法を使ってくるのであれば必要な詠唱(こえ)があるはずだがさっきの魔法には詠唱(こえ)は無かった、ということは・・・・魔法ではないのか？
・・・修練を重ねた魔法使いならば無詠唱でも魔法を使うことがで

きるのだぞ・・・

そうだったのか

隣にいたイスカにとってこのような争いごとは苦手なのであろう耳を伏せて身を抱きしめている

仕方ないイスカのためにもこの襲撃を止めに行くかな

「イスカ、少し待っててすぐに終わらせてくるから」

イスカの頭を2回ほど撫でると馬車から降りた。

あたりの地面には赤より黒に近い大輪の華が咲き乱れ倒れた兵士や襲ってきた者が無数に目に入ってきた

ＯＫ！ＯＫ！落ち着けスプラッタやホラーは映画でそれなりに見てきたじゃないか！吐きそうだが吐くのは後だ、イスカのためにもとりあえずこの騒ぎを止める

レオ、動きを止めるのに適した魔法ってないのか？

・・・無いわけではないが相手を視覚がとらえる必要がある、それよりも相手の死なない程度に痛めつけて動きを封じる方が手っ取り早いぞ・・・

なら電気を使って麻痺させるか

ー我が魔力よー

「なんだこの魔力は！？」

ー我に害する敵を貫けー

「いかん！総員防御体勢を取れ！」

≪疾走する雷≫

「横に・・・落ちる雷だと・・・・！？」

おや、自分の敵だけ当たるかと思ったけど騎士の方々にもあたってるねぇ

やっぱい、副団長さんすっごい見てる

カカシの魔法の範囲外にいた兵士の皆さんに手伝ってもらい盗賊の確保としびれて動けない騎士の方々を運んでもらった。

動けるようになった副団長さんに「貴様の魔法は危険すぎる」といわれ現在猿轡をかまされてます

「むーむー」

何かを話したいわけではないのですが猿轡をかまされるとムームー言ってみたくなります。

「えっとナナシ様が何か言ってるけどわからないです」

隣で困ってるイスカを困らせてしまったのでポンポンと頭に手を載せてなんでもないよとジェスチャーで伝えるさて暫く静かにしていようか。

・・・ナナシが騎士団なんぞに捕まる必要など皆無なのだから蹴散らしてしまえばよかろう？人が相手ではやりにくいというのであれ

ば我が代わりにやってもよいぞ・・・

いや、特に暴れる必要もなさそうだとおもう、イスカや俺に危害を加えそうになったら反撃はするけどこっちから手を出す必要は無いよ、お尋ね者になって追い掛け回されるのもごめんだしね

半日ほどかけて王都ベルリアへ到着した俺達は城へ到着したのだった。

王都ベルリア：初代ベルリア王により建国され魔王軍との戦も減っているとはいえ魔王領に近いこの国では年に一度武術大会が開催されることでも知られていた。

縛られたまましばらくここで待てと言われて暫く周りの様子を眺めながら自分の連行された理由を探していた。

王様が来てからは早かった・・・王様は玉座に座ると

「お前達には武術大会に出てもらうそれまでは客間にて滞在するがいい」

「あの武術大会になんて出る気無いんですが」

「余はおぬしに発言の権利を与えた覚えは無い」

拒否権無しですか・・・近くにいた兵士がもっと敬わんかとか言っていた気がするが無視でいいだろう

で

王のおっしゃった客間はベランダはあるが結界が張ってあるようで手すりから外に手を出すことができない仕様で扉の前には護衛という名目で常時二人以上の兵士がついていた。
城の中は歩き回ってもかまわないと許可はもらっていたがこれも見張りがつくこととなっている

「武術大会に出す為にわざわざ俺を呼んで来た理由はなんだろうな武術大会って言うからには武術をきそうんだろうけど俺は武術なんて知らないしなぁ」

「えっ？そうなんですか？」

おや？イスカの前で武器の類をもったことも喧嘩した覚えも無いんだがなぜそんなに驚いているんだろうか？

「ナナシさんは私の首輪を引きちぎるほどの魔力を持ってらしたので当然相当な地位にいるお方で剣なども使えるものだと思っていました」

この世界では魔力量が高ければそれなりの地位にいることが多いつまり魔力量が多い＝貴族のようなお偉いさんという式が出来上がっていたわけだ。
そして貴族達の間でほぼ同じ魔力量を持つ場合武術によって階級が分かれることもあるため地位が高くなればなるほど武術も使えるという事がいえるわけである。
ただし魔力量が桁違いに多い王族や一部の魔法使いは魔法に特化し武術が使えない…いや使う必要がないらしい

見張りの兵士に聞いたところ試合は降参するか相手が気絶するまで続くそうだ。

「仕方ないな、一試合目で降参して帰らせてもらおうかな」

やることも無いのでイスカの髪や尻尾をブラシングしつつそんなことを言っていると

「邪魔するわよ」

ドレスに身を包んだ美少女登場！歳は17くらいで手入れの行き届いた金髪が腰辺りまで伸びている

「これが今回の挑戦者？これまでと比べると頼りない感じねぇ」

「あんたは誰で何のようだ？」

「え？私の事しらないの？・・・ホントに？さっきお父様と一緒にあったのに？」

この突然現れた美少女さんはびっくりしたようにそんなことを言っていた、当然俺はこの間もイスカのブラッシングをしていたのだが

「私の名前はフィルネシア、フィルネシア＝ベルリア！第2王女よ」

「そっか、で用件は？」

「えっと、私は第2王女なの・・・よ？」

このような対応されたことが無いのだろう急にオロオロしだす王女様、ブラッシングが終わったので王女様に向き合ってイスカにやるように頭をポンポンと撫でながら

「そうだな、フィルネシアはえらいねー」

「そうなの！フィルは偉いの！ってそうじゃない！」

おー王族もノリツッコミってするんだな

「貴方が今度の武術大会に出るって言ってきた凄腕の冒険者なんでしょ？」

「いや、朝のおいしいご飯中に拉致された一般庶民だ」

「くっお父様、嘘の情報を流したわね」

何でも次の武術大会で優勝した相手と婚約を取り決めるという今回は庶民からの参加者もいて庶民が優勝した場合婚約を破棄してもよいと約束をしたらしい

「へー、優勝候補ってどんなやつなの？」

「キリアン公爵家のダリル＝キリアンよ、武術と魔法の腕はこの王国一だって聞いているわ、だけどかなりの自己陶酔者でおまけにミシェル＝キリアンにべったりなのよ！」

「ミシェル＝キリアンってのは？」

「ダリルの母親よ」

ナルシストのマザコンとは・・・このお嬢さんも大変だな

「まぁ頑張れや！」

・・・ナナシ、お主は鬼か・・・

「え！？なんでよ！ここまで聞いたんだから普通なら貴方のために優勝をささげますってなるところでしょ！？」

「ははは、馬鹿も休み休み言えよ？優勝しても俺にはなんのメリットも無い上に俺はいきなり連行された身だ、一回戦が始まると同時にリタイアするんだよ」

「メリット？リタイア？」

「意味は利点と降参だな」

「なんでよー」

軽く涙目になってるフィルネシアはかなりかわいかった・・・

「失礼しますよ！」

おっと客のよく来る日だな

「おや？フィルネシア王女いつもお美しい！このような場所で出会えるとは恐悦至極にございます」

ダリルはフィルネシアの手にキスをする

「ダリル公爵ここへは私に挨拶に参られたのですか？」

「おお！そうでした、初めまして！私はダリル＝キリアンと申します！真紅の騎士の二つ名を持っております、貴方が庶民から武術大会に出るという奇特な冒険者ですか？対戦時にはせいぜい頑張って私の美しい勝利の礎となれることを誇りにおもうがいい！」

今気がついたとばかりにオーバーリアクションを取るダリル公爵、顔立ちは整ってるしさらっさらの金髪体つきは赤い鎧を着ているのでわからないがフィルネシアの腕に鳥肌が立っているのが見えるイスカも怖がっておれの後ろに隠れている

よっぽど苦手なんだな。

「これはこれは、ダリル公爵様こんな私のためにこんなところまで来ていただけるとは貴方の噂はかねがねより聞かせていただいております、私などでは貴方様とお話するなどとても耐えることができませぬどうかとっととお帰りやがってくださいませ」

ばっちり営業スマイルつきだぜ？

・・・うむ、ダリルとやら青筋が浮かんでおるな・・・

「貴様いい覚悟だ！当日は八つ裂きにしてオークどもの餌にしてやるから覚悟しろよ」

「楽しみに待っててやるよ！ほらさっさと帰れよお家でママが待ってるんだろ？」

「失礼する！」

さて、勢いで喧嘩を売ってしまったがどうしたものか

「貴方、一回戦で負けるんじゃありませんでしたの？」

不思議そうな顔をするフィルネシア

「そのつもりだったんだ美人さんが嫌がってるのは無視はできないかな」

イスカとフィルネシアの頭をポンポンと撫でてふと思いつく

「なぁ、一回戦の相手をあのナルシストにすることはできないか？」

王族ならそれくらいできそうだと思ったが

「残念ながら武術大会には王族といえど干渉することはできませんそれに彼はアレでも前回優勝者なので準決勝までのシード権を持っております」

アレが前回チャンピオンとは世も末だな

「よく考えたらおれはあいつに当たらずに武術大会を去る事もできるのか」

「このまま戦わずに去るときっと貴方に暗殺者がつきますよ」

・・・ナナシ自体に暗殺者をつけても返り討ちに遭うだけなのだがイスカを守りながらだと難しいとは言わんが面倒だろうな・・・

「わかりました、ならば優勝すれば金貨２０枚でいかがでしょう？」
お金か特に困ってるわけでもないんだがな
「いや別に金には困ってないから」
「なら・・」
「だがな美人さんの頼みだからな優勝狙ってみるわ」
つくづく美人に弱いな俺・・・そのうち美人局にもひっかかるんじゃないのか
「ありがとう、これから私の事はフィルと呼んでかまいません」
「わかった、フィル、ところで剣を売っている店はあるか？」
「ええ、城下にいくつかありますよ」
「なら明日は城下に行って武器探しだな」
「御自身の剣はありませんの？」
ずっとこれだったからとゴブリンの持っていたナイフのようなものを見せる
「こんなもので戦っておられたのですか・・・」
まぁねと返すとフィルは兵に呼ばれて去っていった。

夕食は部屋に料理が運ばれてきたが奴隷用の食事は別に用意してありますといわれた時にそっちは結構ですと断って二人で運ばれてきた料理を食べた、まさか異世界に来てあーんが体験できるとは思わなかった。

この国には沐浴はあってもお風呂にはいる習慣は無いそうでお湯をもらって体を拭いた、そのうちお風呂に入ろうと固く誓う

その夜、奴隷にはベッドは与えられず床で眠るのが普通だそうだが俺はイスカと契約してから必ず床ではなくベッドに寝かせるようにしていた。
いつもは別々のベットなのだが今日は同じベッドで眠ることになった。

朝というものは必ずやってくるものだ、とりあえず目の前で幸せそうに眠る獣娘を抱きしめてから布団から出て顔を洗おうかと考えていると扉が勢いよく開く

「ナナシ！入りますよ！」

ノックという礼儀は無いのね
扉を豪快に開けて入ってきたのはフィルだったが、開けたポーズのまま固まっている。

「どうかしたか？」

「あの、差し支えなければ教えていただきたいのですが、貴方達の

関係は奴隷と主ですわよね？」

「いや？」

「でも彼女の首には《従属の首輪》がありましたわよ」

なるほど、イスカの首には首輪がついている、服従の首輪にそっくりな単なる首輪だったのだがフィルには服従の首輪に見えるのだろう

「あれは普通の首輪だ、だが他の奴等に取られないように保険をかけてあるのさ」

「そ、そうでしたの、とりあえず服を着ていただけませんか？」

「おっとこれは失礼」

この世界に着てから眠る時は上半身は裸でズボンのみという格好だった。イスカにいたっては下は下着上は何も無しという格好で寝ている、イスカいわくこれが普通だそうだ

シャツの着て未だに眠り続けているイスカに布団をかけなおすとフィルの方へ振り向いた

「それで？何の用だ？」

「ナナシ貴方は少しは私を敬おうとは思わないのですか？」

もう仕方ないなぁフィルさんは・・・（どこぞの青いタヌキの声っぽく）

「フィル、このような時間に貴方のような美しい方が私を訪問して

くださるとはとてもうれしく感じます。」

と少しタカ〇ヅカをイメージしつつオーバーリアクションをつけながら手を差し出してみる。

フィルはゆっくりとその手を取るだけで何も言ってこなかった。

おや？何か言ってくるかと思ったのだが無反応か・・・ならばもう少し遊んでみようかな

「きゃっ」

その手を引きフィルを抱える

「フィル、貴方のきれいな目を見ていると思わず手が出てしまいました。」

アワアワするフィルこれはこれでかわいいな

さて仕上げだ

顎に手を添えて顔を近づけていく、フィルは目を閉じる。

目を閉じたところで鼻をつまんでやる

「ふにゃ！何するのよ！」

「寝ぼけているお姫様に目覚ましをしてやっただけだよ？で？用件はどうしたよ」

「あ、え、ん？あ、そう！剣のことよ！」

「俺の使う剣か？」

「そう！今日一緒に鍛冶屋まで行くわよ！」

百面相したあとにそういい残すと足早に去っていった。
鍛冶屋に行くならイスカを起こしておかないとな、イスカーおきろーあさーあさだよー朝ごはん食べて鍛冶屋に行くよー

「抱きしめてくれたら起きれる気がするー」

抱きしめるついでに頭をぐりぐりとなでてやる

朝食時はちゃんと二人分用意されたので朝食を取って鍛冶屋に行くのはいいがどこで待ち合わせるのだろうか？と考えていたらフィルの方から来てくれた。

「さぁ！鍛冶屋にいくわよ！」

ワンピースを着てどこかの令嬢という感じに変装？しているフィル

「そんな・・・」

そんなに焦るなよって言おうとしたがここはからかう方向でいこうか

「フィル、その服とてもよく似合っているよ、今すぐその服を剥いでベッドに押し倒したいくらいだ」

「え？」

「冗談だ」

顔を真っ赤にしてうつむいたフィルを見てこういう冗談はなれてないんだなと実感する

「ナナシ・・・私ナナシになら押し倒されてもいい」

イスカはイスカで冗談が通じてなかった。

その5～時には逃げることも戦術～（後書き）

物語がほとんど進んでませんね。

次の回は鍛冶屋で剣を買いましょう！ええ！そうしましょう！

その6～忘れ物はないかい？～（前書き）

鍛冶屋！冒険者には武器が必要ですよね！
今の今まで主人公に武器を持たせるって概念をうっかりしてたよ
武器屋のおじさんも言ってたじゃないか「武器は装備しないと意味無いぞ」って

その6～忘れ物はないかい？～

さすがは王都の市場フューディルの町の比じゃない見渡す限り人人人！

・・・どこに何があるのかもわからんな・・・

イスカは俺の隣にぴったりくっついているフィルは前を付き人の人と歩いているもちろん変装はしている他にもこっそりと護衛の方々がいるそうだ。

「ナナシよ！まずは鍛冶屋だったな！」

「あぁ！場所わかるのか？」

「ここは私の庭なのよ？すべて把握してるわ！当然！」

それはちょくちょく城から抜け出して城下へ来てたってことですよね・・・お付の人たちご苦労様です。

「ついたぞ！ここだ！」

ボルドー商会　鍛冶屋

看板にはそう書かれていた、猛烈にいやな予感がする。

「親方ーいないのー？」

フィルはこっちの気も知らないですでに店の中へ踏み込んだ瞬間ム

キムキな手に抱きかかえられる。

「ラッッシャーセェー！おう！フィル嬢ちゃんじゃないか！今日はどうした？また兵士の剣でも折ったか？それともいたずらに使うトラバサミか？そういえばこないだ言ってた冒険者から良質な鉱石が手に入ってな今なら伝説の勇者の剣にも負けない一品ができそうだぜ！」

ボルドー商会に入る条件にマシンガントークって入ってるのかな・・・

「そうじゃなくって今日はこっちのナナシに剣を一本欲しくて」

フィルを降ろすとこちらへやってきた

「おうにーちゃん！今日は剣をご所望かい？ショート・グレート・レイピア何でもあるが希望はあるかい？」

おや、ここは向こうの商会と違ってまともなのか？

「片刃の剣ってありますか？」

「オーダー！片刃の剣」　　「「「「片刃の剣よろこんでー！！！」」」」

前言撤回！一緒だ・・・よくみたらこの人の顔フューディルでみた顔と一緒なんだが・・・分身？

「我らボルドー商会！」

くっ！また後ろか！

「いついかなる時でも」

「お客様の身の安全を考え」

「最高の輝きと切れ味を」

「お届けいたします！」

また避け切れませんでした。

よくみたらイスカは侍女の人があらかじめ避難させてる、ＧＪ侍女の人！できれば俺も助けてほしかった

「しまった、ボルドーさんとこの終わっちまったか？」

「いや、まだ始まったばっかりだ」

「俺これ終わったらパン屋のあの子に告白するんだ・・・・おっといたずらな風が≪羽ばたけ白き純白≫」

「「「みえ・・・・ない・・・・だとっ」」」

おいおいスカートめくりのために魔法を使うのか・・・

「それで！おにーさん既存の剣の内片刃はここにあるので全部ですがこの中から選びますか？それともオーダーメイドで作りますか？」

そうだな、とりあえず資金を見せてこの中から買えるやつを分けてもらおうかな

「えっと今手持ちがこれくらいなんですがどれが買えます？」

財布をひっくり返す金貨や銀貨と一緒に赤と緑の石もでてくる

「お客さん！この石どこで手に入れたんだい！」

おや、キレイな石だからお守り代わりに入れておいただけなんだが単なる石じゃないのか？

「えっとモンスター倒した後に落ちてたんですが」

「そんな簡単にこれが手に入るはずがねぇこれは魔晶石っていって魔力の塊みたいなものなんだ、剣や魔法をつかってもなかなか採取できないってんで市場に出回ることはまず無い貴重なものだ人生で一度お目にかかれたらいいってレベルの代物だぜ？」

「おや、ボルドーさんの様子が・・・」　　　　「おめでとう！ボルドーさんは燃える天災（イフリート）へ進化した！」

「久々にみたな結界の準備するぞ」

「「「「「おう！」」」」」

結界が必要になる展開って予想がつかないんだが。

「おうにーちゃん！にーちゃんも武術大会に出るのか？」

「その予定なんだ、気がついたら出場が決定してそっこ・・・」

「なら話が早い！これを使って俺に剣を作らせてくれないか！金はいらない！俺のこの手が叫ぶんだ、この魔晶石を使って最高の剣を作れってなぁ！」

熱い！リアルで熱い！なにこの熱量！？

「あぁ、おっちゃんの体質でな興奮すると熱を出すんだ・・・奥さんの浮気騒動の時は辺り一面焦土と化した」

え？なにそれ天災レベル！？

「きっと！武術大会には間に合わせる！それまでこいつを使っててくれおおよその形はこれと似たような形になるはずだ！」

「えっと・・・・お願いします」

「おっしゃ！！俺はボルドー商会鍛冶屋をやってるバルドーってんだ！よろしく頼むぜ！てめーら！集まれ！貴族どもの生ぬるい剣作（くずてつ）ってる場合じゃねぇぞ！これから俺が・・・」

すごい勢いで魔晶石もって鉄火場に入って行ったな

渡された剣を見る・・・赤っぽい刀身を持つ片刃の剣重さはそこそこ１０キロくらいかな

ナイフよりかはマシか

「あれ？あのカカシさん、これ刃がついてないです」

いつのまにかイスカが横から剣を眺めていた。

だよね、これ遠目からみたら単なる剣なんだけど刃がついてないもしかしてモンスターを叩き切る剣？

・・・これはめずらしい代物を持ってきたものだ・・・

レオこれ知ってるの？

・・・これは、魔力を使用して切る剣でな、剣に纏わせた魔力によって間合い、切れ味、をかえれると聞いたことがある。過去の戦場ではバーストフレアという魔法を剣に纏わせて相手の体に触れた瞬間に爆裂させて再生させないという使用法もあったのだぞ・・・

すごいものなんだな

・・・いや庶民はそれほどつかわんだけで魔力が潤沢にある貴族共にとっては手入れのいらん便利な道具だろうよ、ただしこれを使うにはそれなりの修練と想像力が必要で今はほとんど使われておらんがな・・・

「さっきのスカートめくり犯は貴方ね！」　「！！！？？？なぜばれた！！！！」

「乙女の勘・・・といいたいけど魔力の残滓がべったりなのよ！」　「くっ！うかつ！！」

「女性の敵は速やかに滅びるべし！！滅びろ！乙女の業火！《バーストフレア》」

「こんなところで死んでたまるか！我は行かん！ハーレムという夢を得んがため！《疾駆・閃光》」

さっき戦場で使われるとか言われた魔法が目の前で使われています

・・・うむ、いつのまにか世界の戦場は一般家庭まで巻き込んでおったのだな・・・

地面に開いた穴をせっせと埋めていく周りの人々これも日常なのだろうか。

さっきもらった剣を両手で振ってみる・・・周りを見回して・・・
片手で振ってみるさすがにぶれる、筋力足りてないね
・・・魔法の補助を使ってみろ、過去にはもっと重量のある武器もあったが魔法による軽量化により片手で使用した例がある・・・
そういえばこの剣は魔法を纏わせたりできる剣、ならばアレができるかもしれない。

「ナナシ、フィルが呼んでる」

「お、おう！すぐ行く」

イスカに呼ばれてフィルたちの下へ

昼食を何にしようかと話しながら歩いているとソースの焦げる匂いがする・・

「こ、このにおいは！」

「どうしたの？」
「良いにおいね」

露天から漂ってきたにおいはまさしくお好みソースの焦げる匂い！
露天をのぞくと中では肉にソースを塗って焼いていた。

「お、いらっしゃい！5本で銅貨1枚だよ」

「え？」

「どうしたの？そんなにお肉食べたかったの？」

「故郷にこのたれによく似たものを使った料理があったんだけどこれとは違ったみたいだ」

一本もらったが味はソースそのもの悪くはないが、ソースならお好みやたこ焼きが食べたい、ここの生活は東洋というより西洋風なものが多いということはタコやいかを食べる食文化も無いんじゃないかな。

そう思ったら余計にたこ焼きが食べたくなってきた。

この町で武術大会を終えて魔王や勇者を何とかするよりまず港町へ行こうと心に決める。

城で軟禁状態の俺達だがこうやって外出していていいのだろうか見張りはいるとしても、そういえば王様の様子は適当に過ごしておけというどうでもよさそうな感じだった、まさか俺たちを呼んだのはフィルだったりするのか？ダリルを優勝させたくないというなら俺よりもっと強い冒険者はいくらでもいたはずだ、Eなんてようやく一人前になった程度の実力がSやAのような高ランクより目にとまった理由が未だにわからない。

・・・首輪の件は貴族たちからしたらなんとしてでも隠したい事実だろうから報告するとも思えんからな、少し対策として今宵から夜

間に魔法の訓練をするか、今のままでは実践では使えんだろうからな・・・

肉をほおばり幸せそうな顔をしているイスカをみながらそんなことを考えていた、が次の瞬間にはイスカとフィルに引っ張られて祭りの喧騒の中へ紛れていった。

城に戻ってきた2人はフィルと分かれてナナシに与えられた部屋にいた。

「少し散歩に行って来る」とイスカに言い残して部屋を出る目的地は裏庭である。

・・・ナナシお前の魔力は制御しなければ人を殺める恐れが十二分にある、よってコントロールの訓練から始めようと思う、まずは魔力を手に集めよ手に収まるサイズでな・・・

こんなものか？

・・・魔力の量が多いわ！、これの１０分の１でも使い方しだいでは人を殺せるわ！・・・・

軽く出したつもりだったんだが軽く俺の顔より大きいな・・・

・・・魔力をコントロールするのはナナシ自身のイメージと精神力だ・・・

お！小さくなった！

・・・ばか者！サイズだけ変えても意味が無いだろうが！もっと魔力を散らせ・・・

そんなやり取りを5時間ほど続けてある程度制御できる頃には月が頭上で冷たい光を放ち、城の中も見回りの蝋燭の光が見える程度になっていた。

部屋にもどったナナシがみたのはベットで丸くなっているイスカの姿であった。

待っていたけど疲れて寝ちゃったかな、イスカ今日のお祭り楽しそうだったからな。

そっと布団をかけてやり自分もベッドにもぐりこんだ。

・・・ナナシのやつまさかあのような方法で魔法をコントロールするとは我も魔法使いとしては異端とされたが我を宿すことで思いついた魔法か、これだからナナシは面白い・・・

翌朝、レオにただ剣を振っていては芸が無いと言われて、仕方なくギルド行くことにしました、イスカもギルドに登録しておくという目的もあったのでついでです。

今回は見張りという名目で一人騎士をつけるならという条件でギルドで仕事を請ける許可を得ました、ただし数日かかるようなクエストはダメだとか。

その騎士様が来るのをこうやって待ってるわけですが、来ませんねー

「イスカ、一日で終わるクエストをやってくるだけだから部屋で待っててもいいんだよ？」

「いいの、私はナナシと一緒にいる。」

「遅れて申し訳ありません！お久しぶりですナナシ様」

そういって現れたのはゴブリンの巣から救出した人質ーズの一人ベルムンドさんだった。
彼は城の警護兵をしていてたまに休暇がてらギルドからのクエストを受けていたという。

「この間は恥ずかしいところをお見せしました、あの時ナナシ様が来てくださらなければ今の私はありませんでした、本当にありがとうございました。」

「いえいえ、偶然あの巣を発見して探索してただけですので」

「ナナシ・・・」

「そちらはナナシ様の奴隷・・・ですか？」

急に俺の服をつかんだイスカにベルムンドさんが不思議そうな目を向ける、普通奴隷が主人に心を許すことは無い。

「いや、俺の旅の仲間ですよ、こっちはベルムンドさん以前ちょっとしたことがあって知り合った人、でこっちはイスカ、奴隷にされてたのを開放しました。」

「奴隷を解放？金を渡して買い取ったではなくて？」

「細かい話は長くなるので省きますが買い取りではなく開放です、ですのでイスカは奴隷ではなく俺の仲間です」

「それは失礼、無礼を申しました、イスカ様」

その場でベルムンドさんはイスカに対して謝罪する。

「え、ええっと・・・気にしてないです」

「そうそう、ベルムンドさん俺の方がどうみても年下だし敬語はおかしいんで様とか取っ払っちゃってください」

「いや、ですが私は今回王からの命を受けて護衛してますので」

「なら前回助けた礼ってことで敬語なくしてください、そういう対応になれてなくてさっきからむずむずするんですよね」

「わかりました」

そんなやり取りをしながらギルドの掲示板をのぞいて見る。

さて一日で終わるクエストでいいものは無いかなっと・・・

「そういえばクエストを受けるとおっしゃ・・・言ってましたがナナシはレベルいくつなんですが？」

「レベルEだよ」

「Eレベル！？」

ゴブリンを一匹相手するのは簡単だが巣を攻略するとなると複数のゴブリンを相手するとそのレベルはＤ－Ｃレベルとなるましてあそこの巣のゴブリンの親玉は魔法を一切受け付けず自分の剣でも切れなかった相手だ、ベルムンドのランクはＣランクでそれ以上だと思っていたばかりに驚きを隠せなかった。

「まぁそんなにいそいでランクを上げる必要も無いと思ってるから旅しながらゆっくり上げていこうかと思ってるんだ」

「そうなんですか、お、これなんかどうですか？」

「魔法庁にて片付けの手伝いか、これなら一日で終わりそうだしコレにしますね」

「はい、ではこちらのクエストを受注ですね、御一人ですか？」

「いえ、ベルムンドとイスカの３人です、あとイスカは登録してないので登録したいんですけど」

「わかりました、ではこちらへ」

イスカの登録が済み魔法庁へ向かうと部屋いっぱいに箱が積まれていた。

「いやー、君達がギルドから来た冒険者の人？私はウォルター、ウォルター＝デイビットだ、ここの所長を務めている。」

「ナナシです」「イスカ・・・です」「ベルムンドと申します」

「早速だけどとりあえず君達にはここの木箱を上の回まで運んでもらいたい」

「わかりました」

木箱はおよそ５０、結構な数がある、さくさくやっていかないと日没までに間に合わないかもしれない

「ん、これは結構重いですね、イスカさんは大丈夫ですか？」

「大丈夫・・・獣人族は人族ほど弱くないから」

へー、イスカの華奢な体つきしてるのにベルムンドさんが苦労して持ち上げた木箱を片手で運んでいる、目を疑う光景だわ

「さてと、俺も運ぶかな・・・って重っ！」

イスカがひょいひょい持ち上げてるのみて自分も簡単だろうと思ったんだけどナニコレ超重い。
ギリギリ一個をよろよろ持ち上げる重さだ。

「仕方ない、こういうときこそ魔法だよな。」

昨日の特訓で覚えた魔法《強化》体に魔力を纏わせることにより体を強化する結構ポピュラーな魔法らしい。
体を強化した俺と何も使っていないイスカが木箱をどんどん運び思ったより早く運び終えることができた。
お礼も兼ねて少し遅めの昼食をおごってくれるというので食堂でご飯を食べていると

「所長！大変です、研究中の精霊獣が暴走しました！」
「なんだとっ、すぐに行く！」
「よかったら手伝いましょうか？」
「助かる！こっちだ！」
そこにはトラのような獣が雷を放ちと豹のような獣が辺りを凍らせていた。
「あいつらはなるべく生かしたまま捕獲したい、できるか？」
「やってみます」
とはいったもののどうしたものかな
「イスカ、ベルムンドさん魔法は？」
「回復が・・・少し使える」
「ファイアボールぐらいしか使えない」
「イスカは支援、俺とベルムンドさんでアレを気絶させます」
「おう！」「・・・わかった」
ベルムンドさんが剣を抜き虎へ向かっていく、虎が迎撃しようと雷を打ち出す前に≪ノイズ≫で妨害する。

≪ノイズ≫：ナナシオリジナル魔法、ガラスを引っかく音に似た不快な音を大音量で聞かせる、ただし実際の音ではないため周りには聞こえない。

その間に豹に向けて≪疾走する雷≫を放つが氷壁によって阻まれる。

・・・守りながらではらちがあかんな、一気に決めろナナシ・・・

≪強化≫を目、手、足にかけて一気に間合いを詰め氷壁を破壊しその奥にいた豹もまとめてなぎ倒す。

虎の方を見るとベルムンドさんが間合いを詰めれず苦戦していた。

「ずぶぬれ小僧が泣いている、雨に降られてないている！≪濡れ鼠の憂鬱≫」

≪濡れ鼠の憂鬱≫：ナナシオリジナル、空気中の水分を集めて相手の体をずぶぬれ状態にする。

・・・ナナシ、お主詠唱センス無いな・・・

うるさい、次から無詠唱にしよう。

「はぁぁ！」

虎へ鞘をたたきつけて虎が気絶する。

「いやー助かりました、ところでナナシさん今の魔法は？」

「昨日思いついた魔法なんですけど役に立ってよかったです」

言えない・・・透けたワイシャツってエロイよなって考えたらできた魔法だなんて。

「そうですか、このあとよかったら魔法庁恒例の祭りにナナシさんも参加してみませんか？」

「何するんですか？」

「みたらわかりますよ」

つれてこられたのは体育館ほどある大きな部屋でここの研究員と思われる人たちが２列に並んでいた。

「では、軽く準備体操してください」

ウォルター所長がそう言うと研究員の人たちが向き合い一方が魔法を打ち一方が魔法で防ぎ始めた。

「とまぁこんなかんじで魔力順列を決める大会でもあるんですよ、ルールは簡単攻撃側は捕縛魔法を打ち、それをもう一方が防ぐそれだけです」

「さっきの精霊獣との戦いを見てたらナナシ君のほかの魔法も見たくなってね」

捕縛魔法か目の前でやってるのをみると鎖のようなものが巻きついたり、足元が沼のようになったりと多彩である

「それじゃあ本番行ってみようか、今回は趣向を変えてこのナナシ君を捕まえた人が一番って事で賞金１０００Ｇだ！ナナシ君は捕ま

らなかったら１０００Ｇね」

「えっ！？」

「場所はこの部屋のみ制限時間は１０分間！それじゃあ始め！」

いきなりかよっ！研究員の人たちが走りながら詠唱してくる・・・

約２０人ほど皆さん必死すぎて超怖い！。

「私も・・・ナナシ捕まえる」「なら私も参加いたしましょう」

さらに2名追加！！？？

≪強化≫≪脳内チャット≫発動！

≪脳内チャット≫：ナナシオリジナル、レオと会話することで思いついた魔法、意識のなかに複数の意識を存在させることで複数の魔法を同時に使用することが可能となる。

光る鎖の対象を変え、突然できた沼を時間をとめることで回避、絡み付いてきた草を焼き払って逃げる！

「やりますね！これならどうですか！狩人は獲物がかかるのをじっと待つ≪捕食者の網≫」

所長さんは蜘蛛の巣のような光の網を作り出すかなり広範囲を対象としているようだ。

「こうなったら逃げ切ってみせるっ！」

足にさらに魔力を込めて急加速して逃れる。

あるものは鎖に巻かれ、あるものは首まで沼につかり、ロープでつるされた者、粘着質な物質にとらえられた者がそこらかしこにいる、ウォルター所長とナナシは向かい合っていた

「まさかここまでやるとは思いませんでしたよ」

「逃げるといったからには全力で逃げますよ」

「そろそろ私の魔力も限界なんでねこれが最後です！飽くなき探求の欲望よ！渇望するは永劫なる時≪空間呪縛≫」

これって時間固定か！≪ノイズ≫≪侵食虫≫

≪侵食虫≫：ナナシオリジナル、相手の魔法に使用されている魔力を分解する。

「まさか≪空間呪縛≫が破られるとは思いませんでしたよ」

あっぶねぇ・・・≪脳内チャット≫のおかげで助かったー

「あはははは」

「時間も残り１０秒ですね」

１０、９、８、７、６、５、４、３、２、１・・・

「ナナシ・・・捕まえた」

「えっ！？」

ぎゅっと抱きしめてくるのはイスカ

「というわけで勝者！イスカさん！」

うわぁーそういえばイスカを見落としてたー

・・・詰めが甘いの・・・

賞金１０００Ｇをもらってうれしそうなイスカ、さっきまで逆さ吊りになってたせいでふらふらしているベルムントさんと共にギルドへ行き報告し城へ戻った。

部屋に戻るとフィルがいて

「なんでそんな楽しそうなことに私を誘わないのよ！」

とお叱りを受けた。

その6～忘れ物はないかい？～（後書き）

《空間呪縛》は空間が固定されてるのなら時間も進まないから考えられないの《無詠唱も無理》ではないかという疑問は≪脳内チャット≫という魔法で生まれた意識も魔法効果ということで時間の概念を受けないということで自己解決しました。

にしてもホントストーリーが進んでないですね。次は武術大会が始まるところまでは進みたい。

行間　～紅き竜は囚われる～（前書き）

主人公視線ではなく他のキャラ視線から武術大会編スタートです

行間　～紅き竜は囚われる～

朝、またあの忌々しい人族の顔を見ないといけないかと思うと自然とため息が出た。
不愉快極まりない、なぜ誇り高き竜人族が人族なぞに媚へつらわなくてはいけないのだ！それもこれもこの
首輪せいだ！

あれは3年ほど前
人族の商人としてやってきたグルマという男にこれは世にも珍しい首輪で装備すればどんな魔法であっても
すぐに制御できるようになると偽り当時はまだ魔力の扱いに慣れていなかった私は他の者からけなされるの
に耐え切れずついその甘言にのって≪従属の首輪≫なんぞつけてしまった私が愚かだったのだろう。
あの失敗のおかげで下種な人族売られては玩ばれ飽きれば売られてを繰り返してきた、この首輪には闇神の
加護のおかげで命令に逆らうことはおろか攻撃の意思を主人に向けることさえできない、何より首輪を無理
にはずそうとすれば闇に囚われる。
もう自由に空を飛ぶことも無いのだろうな・・・。

ははは、もう涙なんぞとうに涸れたと思っておったが我にもまだ流す涙が残っておったか。
まだあどけなさの残る少女のほほを涙が伝う、紅き長髪に真紅の瞳、そして鱗のびっしり生えた尻尾が人族
でないことを証明していた。
「この世を旅立つ時は番となる雄と一緒にという夢や幼子をこの手に抱くことも叶わんかったか。」
ぼそりと呟いたその言葉は他の奴隷達の耳にも聞こえたがほとんどの者は希望を失い目に輝きを失っていた
。
「リィムトゥース来い！貴様の新たな御主人様になるかもしれない御方が来ている、せいぜいかわいがって
貰えるように尻尾振って媚を売るんだな！」
いつの日か自由になったらまずこいつを殺してやる。
そう決意しながら向かった先にはいつのものようにいけ好かない人族の「貴族」とよばれる生き物が椅子に
腰掛けていた。
「おい、竜人族の上物がいると聞いてきたのにこんな餓鬼を出すとは貴様フィーリアス家を馬鹿にしている
のか！」

確かに今の私は人族の子供の姿をとってはいるが人族の年齢にすれば百年はゆうに超えているというのにそ
の私に向かって餓鬼とは
「め、めっそうもございません！このような餓鬼の姿をしておりますが見た目はこのような餓鬼でも竜人族
でございます！嘘だと思われるのでしたらこちらの剣でかの者を切り付けてお確かめください、竜の鱗はそ
の程度の武器では怪我はおろか傷一つ付くことはありません。」
近々行われる武術大会に向けて自分の代わりに奴隷に戦わせる奴がいるそんな奴らへの商品の性能確認だそ
うだ、確かにその程度のなまくらでは私の鱗に傷一つつかんが自らの力を見せずに力を誇示することになる
というのはいつ聞いても可笑しな話よ。
私を剣で切りつける貴族の男、剣はぽっきり折れて飛んでいく。
「おお、鉄の剣がまったく歯がたたんとは！よしこいつをもらおう！いくらだ？」
どうやら次の主人はこのあほうのようだな。
「ほら！ついて来い！俺が今日から貴様の主人だ！」

「かしこまりました」

心の中でこの馬鹿がと付け加えておく

私がこのあほうに買われて2日たったがこの「フィーリアス家」というのはそれなりの地位をもった人族だあるらしく、私と同じ奴隷がたくさんいた、種族は人族、獣人族そしてあのエルフ族までもいた。

このエルフはもとは隠れ里にて住み薬や治療を生業としていたらしく道端で倒れたふりをしていた人族に捕らえられ奴隷となったらしい。

この家にはあのあほうの他に弟が一人と両親がおるらしいが父親も弟もクズであると他の奴隷の娘達が嘆いておった、母親は優しい性格で他の者がこの家の者で唯一心を許しておる存在だそうだが体が弱く寝たきりだという。

私と入れ違いのように出て行った獣人族の娘がいたそうだ、なんでもあほうの弟の奴隷であったがどこぞの

庶民に取られたと大層腹を立てていたとか。
その話から奴隷の娘たちの間では通りすがりの心優しき勇者様が虐げられる獣人族の娘の美しさに心奪われ
悪の貴族の魔の手から救ってくれたなんていうストーリーが会ったりする。
どこの誰かはしらんがよくやったと褒めてやりたい、ん？取られた？まてまて、私たちはこの≪従属の首輪
≫がついている限り主人はこのあほう共から変わるわけが無い。
ということは・・・

「まさか、この首輪を破り無事な者がおるのか？」

闇神の加護を受けしこの呪具を人の身で破壊したというのか？
もしかしたら私の首輪も壊してもらえるかもしれない、また空を飛ぶことができるかもしれない、そんな夢
がリィムトゥースの中に新たな希望として芽生えた。
ただし彼女は未だ見ぬお人よしで獣人族好きな勇者は竜人族の自分も救ってくれるのだろうかと少し不安に
なった。

翌日、あほうがやってきて私が武術大会に出るにあたってどんな魔法が使えどれだけ剣が使えるかと問うて
きよった。

自慢ではないが剣なんぞ生まれてこの方持ったことなど無いと伝えてやる、むしろ我ら竜人族の武器は己が
体であり武器なぞ玩具にしかならんのだが
「そんな武器を使わずに戦うなんてなんて野蛮な！美しさの欠片も持ち合わせてないのか！これだからトカ
ゲは・・・」
貴様の身を包んでいる鎧なんぞこの爪にかかれば絹を裂くよりたやすく真っ二つにできるというのに、貴様
の許しさえあれば実演してやるのに・・・
「魔法は炎術というかブレスしか使えんぞ？」
まぁ実は他にもいろいろ使えたりするのだが全部教えてやる必要など無い。
「魔法に対する防御はどうなんだ？水術に弱かったり土の槍には簡単に貫かれてしまったりしないのか？」
こやついったい私を何だと思っているのだろうか？竜人族は生まれ持って魔法に対する耐性が高い、私の場
合は炎とは特に相性がよいらしくマグマの中で泳ぐことが可能だ。
それから武術大会まで剣を使う練習をさせられた。

歯をつぶした剣を使ってカカシを殴ってみたり（カカシがこなごなに砕け散った）
重い棒をもって素振りしたり（衝撃波で屋敷にひびが入った）
と試した結果棍棒のような鈍器の方が相性がいいという結論に達し、手元は柄だが刃の部分が四角い鉄の塊
というものを本番では使うそうだ。
もう両手で数えるほどで武術大会だと思い出した時
「おい奴隷貴様にやる気が見えん！まさかと思うが武術大会ですぐに敗退しようとか考えるなよ？お前は優
勝するんだ、貴様の命より優勝を優先しろよ」
私の命も軽くなったものだ。
「命令するだけでは芸が無いそうだな、貴様が優勝すれば貴様の願いを一つ叶えてやろう。」
え！？ネガイヲヒトツカナエテヤロウ？
「優勝すればこの首輪から開放・・・される？」
「あぁついでだ故郷まで送り届けてやろう」
目の前が滲んで何も見えなくなる・・・優勝すれば家に帰れる！
この貴族が出した甘い、甘すぎる餌は今のリィムトゥースの思考を
「武術大会での優勝」で埋め尽くした。
愚かな竜の娘を見ていたレイナルド＝フィーリアスの兄、ケルテュ

ム＝フィーリアスは暗く静かに笑みを浮かべていた。

翌日からリィムトゥースはただ勝利を求めてひたすらケルテュムの用意する冒険者を負かして力をつけていった・・・。

武術大会まで残り2日となった今日、リィムトゥースがケルテュムに用意させた薬草、毒草、鉱石などさまざまな物が目の前に並ぶ

「こんなものどうするのだ？」

「私はこれからこれを使って奥の手を作る、これは竜人族にのみ伝わる物だ、だから主人とはいえ他の種族が見ている前では作れないしばらく一人にしてくれないか？」

「いいだろう！飯などはそこの扉の前に置いておく勝手に取るがいい、明日またくる」

「わかった」

もし、この奥の手を使うことになる相手がいるとしたら同じく奥の手を使った竜人族か伝説クラスの猛者だ

ろう。

大会前日、ケルデュムに連れられて武術大会の登録をかねて下見に行く。
全身をローブで覆い招待を隠し大会当日まで対処法をとられないための予防だった。

「はい、ケルテュム＝フィーリアス伯爵様の代理奴隷としてリィムトゥースを出場ですね承りました」

登録を済ませると下見を始める、魔力による探知に反応は無いおかしな匂いも・・・ないとしたところで強

大な威圧感を一瞬感じる、今の自分なら片手どころか息一つでこの世から消滅させられる程の力、しかし自

分の隣にいるケルテュムも他の出場者達もまったく感じていないようだ、もしやこの大会のレベルは自分と

は比べ物にならないくらい高いのではないか？あれだけ強大な気配を一瞬とはいえ感じないわけが無い、木

に止まっていた鳥はすでにどこかへ飛んでいってしまってこの近くには鳥の声が聞こえない。

「あの、ケルテュム様先ほど何か感じませんでしたか？」

「どうした？戦う前からびびったわけではあるまい？」

やはり隣に立つ人族は感じなかったようだ。
ん？そういえばさっきから受付の方が騒がしい気がする、何か揉め事でも起こったか？耳を澄ましてみると
「怪我人は術者だけか」や「自業自得だよ」等という声が聞こえる。

「それでは帰りましょう」
「もういいのか？」
「はい、下見は十分です、これから明日に向けて魔力を蓄えます」
「では戻ろうか」
たとえどんな怪物がやってこようとも私は勝利し私の帰りを待つあの村へ帰るんだ！

家に戻るとなんだか他の奴隷達があわただしく動き回っていた。
「何事だ！」
「お帰りなさいませケルテュム様、それがレイナルド様が・・・」

レイナルドの部屋へ駆け込むケルテュム、レイナルドは顔と右腕に大きな熱傷を受け痕を完全に消すことはできなかったそうだ。

「レイ、どうしたんだ！次男とはいえフィーリアス家の血を受け継ぎし者がここまでやられるとは相手はどんな奴だった！？」

「ごめんなさい、ケル兄様、私も武術大会へ参加登録するべく列に並んでいるとあの庶民がいきなり私に向かって火球を放ったのです」

「なんだと！？例のレイから獣人の奴隷を奪ったというあの庶民か？」

「はい、髪も瞳も漆黒のように黒く腰にグレートソードとソードの中間くらいの大きさの変わった剣を持っておりました、私は悔しいです・・・あのような者に二度もやられさらに私のこの美しい顔に傷をつけるなんて」

「安心しろレイ、敵は必ずとる！肉片一つ残さず刻んでくれる、フィーリアス家にたてついた事を後悔させてやる、だから安心して療養なさい。」

「貴様も聞いていたな？もし対象が武術大会に出ていた場合生まれてきたことを後悔するほど痛めつけて殺せ、命乞いや降参などは許すな確実に息の根を止めろ。」

「私は人族の見分けがほとんどつかないできれば対戦相手が対象であったなら合図等で教えて欲しい出なければ対戦相手をすべて等しく殺さねばならなくなる。」

「いいだろう対象だった場合に《ライト》の魔法を使って貴様に知らせてやる」

部屋に戻って、さきほどの話に妙な違和感が残るあのレイナルドという男、何か隠していないか？と考えるのだが何がおかしいのかわからない。

だめだ、明日の大事な試合の前に雑念は捨てなければ。

あいつらの復讐は言ってしまえばついでだ、私が今考えなければいけないのは明日を確実に勝つこと、途中

で負けてしまえば私は命を奪われる所ではすまないだろうな、いや負けた時の事など考える必要など無い！

私は明日、勝利を重ねて優勝という名の自由へ翼を手に入れるんだ。

「私は、まだ終わってなどいない！明日すべてに終止符を打ち村へ帰るんだ！」

空を見上げると大きいが少しかけた月が見えていた、紅い髪の少女は天に向かい手を突き上げ吼える。

明日、満月の元で私は故郷への馬車に乗っているはずだと自分に言い聞かせながら床についた。

行間　～紅き竜は囚われる～（後書き）

少しずつポイントが上がって行くのはうれしいですね。
こうしたほうがいいんじゃないかといったアドバイスなどあったら送っていただけると作者のスキルアップに繋がるのでとてもうれしいです。

次は主人公視点にもどります

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9719y/

痛みとウサギと追いかけっこ

2011年12月9日02時12分発行